

---

# 天地無用！ GXP オリ主活動日記

雪野 ウサギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天地無用！ GXP オリ主活動日記

### 【Nコード】

N6785P

### 【作者名】

雪野 ウサギ

### 【あらすじ】

妹である藤崎眠フジサキネムを救うため天地無用の世界にたびだつ兄、藤崎おきる。

はたしてその方法とは！？

この物語は天地無用の世界で兄が妹の病の原因をなんとかして取り除くことを目的とした、そんなものがたりです。

## 妹の告白（前書き）

初めて投稿するペンネーム「雪野ウサギ」です。  
いろいろとおかしいところがあるかもしれませんがよろしくお願  
いします。

楽しんでもらえれば幸いです。

## 妹の告白

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ーちゃん！」

一月一日。年初め、僕は妹こと藤崎<sup>フジサキ</sup>眠<sup>ネム</sup>12歳が入院する特別病棟の一室で妹の元気すぎる声に僕、こと藤崎 おきる は、目を覚ました。妹が寝ていたベットに病院備え付けの硬いパイプ椅子をそばに置き、頭を妹が体を預けるベットに頭だけ寝ころがらせてもらい、今日という日を迎えた僕にとってお尻が痛いことこのうえない年初めになってしまった。しかも、昨日は夜遅くなるまで妹が大好きなアニメやら小説やら漫画やらの談義をしていたのでかなり眠い。

「ふふ、おはようお兄ちゃん。目の下に熊さんが二重ですよ」

「熊さんでーっす」

僕は妹の調子に合わせるように「がー」と獣になって見せた。するとどうだろう。ここが悪い意味で特別な入院患者が入院する場所であるということ忘れてしまうほどの妹の笑顔が僕に返ってきた。そうして妹は僕を見ていつものようにくすくすと笑う。そうして決まって僕の妹、眠は、こういうのだ。

「お兄ちゃんは眠を楽しませる天才だね」

と、でもそんな言葉に僕はいつも決まって首を振る。僕を楽しませてくれるのは眠であって僕じゃないと。そういうと、眠は僕にこういつてくれた。

「じゃあ、お互い様だね」

と、こんなにかわいくて性格のいい妹はほかにいないんじゃないだろうか？いやないだろう。のろけもはいつているが、そんなのどうでもいい。僕を本当に兄として認め、愛してくれるというのは本当にうれしかった。

そう思っていたやさき、突然妹が胸を抑えて苦しみ始めた。額には脂汗を浮かばせ、頬が赤い。僕は急いで妹に駆け寄り背をさするとナースコールのボタンを押した。

「お兄ちゃんあり・が・と」

そんなはかなげに僕にお礼を言うてくる妹に僕は背をさすることしかできない。そんなもどかしさに耐えられなくなりながらも、僕は妹の体を支えナースと専任の医師が来るまで背をさすりつつつけた。

妹の病気の原因は不明である。これが妹に対する診断だった。妹が五歳か六歳くらいはまだ普通の子供といった感じで5歳上の兄である僕といつも公園や家の中を駆けずり回って、よく親に物を壊して怒られた。けれどいつからかそんなことができなくなったのだ。突然妹が胸を抑えて倒れたのだ。このときは検査入院ということであり入院後帰宅することができたが、日をたつうちに発作が出る感覚が短くなっていったのだ。そうして外に出歩けない体になって今に至るといふわけである。昨日だって本当は夜遅くなんて起きていてはいけなかったのだ。だけれど、新年だらいいでしょ？なんていわれて断れなくて、外にいけない妹の唯一の楽しみである。小説、漫画、アニメの談義で盛り上がってしまった。あー無理にでも寝かしてつけてしまえばよかったか、でも外にいけないぶん妹には楽しんでもらいたかったのだ。だめな兄だなと僕は思いつつ僕は妹の診察が

終わるまで病室の外で待ち続けた。

「お待たせしました。藤崎さん。妹さんいま安定して眠りについたところですよ。鎮痛剤を投与しておきました。」

「はい、有難うございます。先生。ところで、まだ妹の病気の原因はわかりませんか」

「申し訳ない、ことらでもさまざまな病例が書かれた論文やら学術書をあさっているのですが、……」

「そうですか。ひきつづきおねがいします」

いつもの会話、いつもの会話。ぜんぜん妹は治らない。だれか、神様救ってください。

そう思わずにはいられない。妹は今深い寝息をたてて眠っている。きっと薬の影響だろう。新年の初めから寝ることではしか痛みを抑えられないなんて本当に悲しいな、かなしいよ。父さん、母さん。早く帰ってきてくれよ。僕一人じゃ支えられねえ。妹の眠るベットのシーツにぼつぼつと雫が落ちる。それが広がり、しみを作って初めて僕は泣いているんだと、そう気づいた。それを気づいてからはもうなんの我慢もできなくて、ただ泣いた。

僕等の両親は医者である。しかもかなり凄腕の、だからか妹の原因不明な病気が許せなかった。だからうちの両親は妹の世話を一時すべて僕に任せ全力で妹の病気を治すため今世界中を駆けずり回り、似た症例がないか探している。それとともに直す方法を、それを待っていて一年が過ぎた。両親とは定期的に連絡を取ってはいるが、

両親の満足のいう答えにはいきあたらないようだ。必死すぎて倒れないかと心配なほど働き、その空き時間に妹の病例を調べているのである。それは、途方もない苦労だろう。他の患者を心配しながら愛娘の助けの手立てを探す。僕はこの両親を持つことに誇りに思っている。だが、僕一人ではどうしようもないことを日に日に強く感じる僕であった。

「泣かないって決めていたのにな。」

一年たつて限界つて、なんだそれ、親や妹のほうに苦労はもつとあるはずなんだ。もつとしっかりしなければ。僕が思わずそう考えボソツと妹の眠る横でつぶやいたそのとき妹は目を覚ました。急いで目をこすり顔を整えた。

「お兄ちゃん？ 泣いてたの？」

はは、妹に隠し事はできないな。でもここは何とかごまかさないと兄としての沽券にかかわる。だからせいっぱいの笑顔で僕はこう答えた。

「大丈夫、大丈夫だよ。ちょっとあくびをしたただけだから」

「うそつき……」

「嘘とはひどいな、は、は、は」

ごまかしきれるか？きついか？僕の背中に冷や汗が伝う。そんな僕に妹はしょうがないとでも言うように。僕のほうに身を乗り出すと妹のそばに立っている僕の腰に抱きついた。そうして妹は照れくさそうに唇を動かした。

「もう。お兄ちゃん。大好きだからね？」

そうくるか、そうきますか、妹よ。本当にこのできた妹にはかないません。もうお兄ちゃんは弱気になんかなりません。絶対に最後まで何があっても妹と忍耐していくと、そして喜びを得て見せると、僕は心の中で誓った。

だから父さん、母さんもう少しだけ僕は一人でも大丈夫です。だからがんばって眠ネムの病気を治す手がかりを見つけてください。

そうして時は過ぎ僕と妹はいつものように二次小説のような談義をすることにした。あの世界にいったら、僕は、私はという感じである。そういえば妹はよく名前があらわすようによく眠る。病気の影響や、薬の影響もあるかもしれないが妹は昔からよく眠りよく夢を見た。しかもその内容をすべて覚えているのである。しかもその内容が面白い、そうであらば聞かないわけにはいかない。よって僕はいつもその話をしてもらうのが毎日の日課になっているのである。よって僕は今日もその話を聞くことにした。

「今度はどんな夢を見たの？」

「えつとね……えつと」

どうしたのだろうつつもなら喜んでこつちから話を振らなくても話してくれるのに何か怖い夢でも見たんだろつか？そんな思考をする僕をよそに眠は何か覚悟を決めたかのような顔をして僕に話しかけてきた。

「お兄ちゃん。眠のこと守ってくれる？」

何でそんないまさらのことそんな必死に聞いてくるんだろう?と思  
いながらも僕は自信を持って答えた。命を懸けてと。すると妹はま  
た僕に問いかける。

「それはどんなに離れていても変わらない?」

「そんなことはもちろんだよ! どうしたんだい、何か悩みでも」

「うん、眠ね話さなきゃ聞けないことがあるの聞いてくれる?」

「話してみな」

「うん………。眠はよく夢を見ます。それはよく知っている  
よね?」

「ああ、いつも楽しみにさせてもらっているよ」

「眠もね。夢のこと話すのも見るのも楽しみなんだけれど、夢を見  
る頻度がここ最近異常なぐらい多いの。」

「異常?」

「そう。しかも昔だったらいろんな世界たとえば私が眠る前に読ん  
だ本だったり、アニメだったりする世界の夢を私はいつも見ていた  
の。でもね、調子を崩してからいつも同じ世界の夢を見るの。」

「同じ世界?でもそれはそれほど強い願望があるから見えるんじゃない?」

「そうね。眠も実際つい最近まではそう思っていたの。でも違う。  
今まで眠がお兄ちゃんに話してきた中で共通する話題は何?」

「天地無用？」

「そう、お兄ちゃんも眠もテレビにかぶりついてみたあの天地シリ  
ーズからだよね。」

「そういわれてみれば、ここ最近の会話はそれ一辺倒ですごい好き  
なんだなーっていつも思ってた。でもそれが、原因不明の病の原因  
とは思えないんだけれど」

「そう、だね。そうだよ。夢自体が悪いんじゃない。悪いのはね。  
つながりすぎてしまった眠なの。」

「つながりすぎてしまったって、どういうこと？」

「笑わないで聞いてほしいんだけど、眠は平行世界とパスをつな  
げる能力があるみたいなの。」

「というと、何かしらの異世界に自分の意識をつなげることができ  
る能力があるってこと？ そんな馬鹿な！」

「そんな馬鹿なことがあるんだよおにいちゃん。」

妹の大きな声が病室に響いた。特別病棟ということもあり音漏れの  
心配はないが、ここまで激しい感情をぶつけてきた妹を僕は知らな  
い。その目は真剣で嘘を言っているようにはまったく見えず、こんな  
真剣な妹が言うことを僕は兄として受け止めてみようと一年以上も  
世話になっているパイプ椅子を引っつかんで、妹のいるベットのそ  
ばいつもの帝位位置である寝たときに頭のくるほうへおくと姿勢を  
正して深く座り込んだ。

そんな僕の行動が落ち着くの見ながら妹は、何を話せば一番理解してもらえるだろうかと手をもじもじさせて妹は考えているようだった。これは眠の癖でありこの状態となった妹の言うことは嘘はないと断言できる。そんな関係が深い家族だからこそわかる癖を僕は見て、これから話されることはすべて信じてみようと思った。そして少し時間がたったのち考えがまとまったのか。自身のことを語り始めた。

「この能力はね、お兄ちゃん。ただ世界の扉を開けてそこをのぞき見るだけの能力なだけけれど。正しく使えば何も問題がないものだったの。」

「と、言うことは自分で悪くしたということ」

妹は兄である僕のその言葉に申し訳なさそうにうなずいた。

「ごめんなさい。眠が悪いの。世界からの忠告があったのにもかかわらず眠はパスを同じ世界とつなげすぎた。だからそこに道ができてしまつて。眠の生命エネルギーが他世界へ流れるようになってしまったの。」

「どづいこと？」

僕は、妹の言葉に更なる説明を求めた。それは、かなり重要なことだと思つたからだ。世界からの忠告……神様だろうか？まあそれはそれとしてその忠告を無視したのはかなり問題があるだろうが、なぜ生命力が移動しなければいけないんだ？もしかしたらそこに妹を救う手立てがあるかもしれない。そんな僕の妹は十二歳という幼い子供ながらも兄を理解させようと手をもじもじさせながら必死に考え答えを提示する。

「つまりね、お兄ちゃん。世界はバランスを保とうとするということ。普通だったらいるはずのない生命体が、とこかしこに扉を開いて世界を見て回ったらその世界との関係が、自身がいる世界と同等になってしまつて。天秤のようにバランスを取ろうする。ってこと。だから私はあるいみ体が二つに割かれそうになっているということ。」

「つまりは、どっちも眠がほしくて引つ張り合っていると」

「解釈的にはそれが正しいね。でも、私を世界が欲しているというより。他世界にいる私と今ここにいる私が引つ張り合っているというのが正しいかもね。だってその世界に行きたくてたまらない私とこの世界の関係を大事にしたい私がいるんだから」

「そついうことかー。SFだなー」

僕はやっと妹の言葉を理解することができた。嘘っぽいといえばそれまでだけれど。僕は信じると決めた。じゃあ僕はどつしよう。もうそんな力使うなどでも言うのか？

それで解決知るのか？まあ、まずは聞いてみよう。その力というものに詳しいのは本人であろうから。

「眠。その力はもう使わないことによつて世界とのパスは閉じられないのかな」

「お兄ちゃん。眠の話信じてくれるの？」

よっぽど自分の話が信じてくれたのに驚いているのだろう。きっと何嘘言ってるんだと。しかられるのを創造していたことであろう。

そうじゃなくてもあきれてもも言えないというのを創造でもしていたんだろう。でも、僕は信じるさ。お前をもっとも信頼しているお前の家族がこんな真剣な妹の言葉信じないわけにはいあかないだろう？

だから、僕はこういった。

「信じるに決まっているだろう」

「お兄ーちゃん。」

妹は僕に飛び込んだ。

「お兄ちゃん。眠、眠、死にたくないよー」

眠は顔を悲しみでくしゃくしゃにして、涙を流し、鼻水をたらしながら僕の胸に収まった。

僕は強く強く抱きしめて。眠が落ち着くのを待った。絶対に助けるという思いを新たにしている。

今日はいろいろと泣いてばかりだな二人ともと今思ったのは予断である。

そうして時が過ぎ僕は落ち着いた妹に提案した。二人でどうすればいいか考えるということそして、世界を飛び回って妹の病気の手がかりを探している父さんたちを呼び戻そうということ。そして妹はうなずいて答えてくれた。早速僕は携帯で国際電話をかけてこようとしたが、妹はなにやらぐずるようにベットから去ろうとする僕の服を捕まえた。そこで気づくきつと眠は自分で父さんと母さんに連絡したいのだろう。それなら僕は妹に携帯を渡した。

「お父さんと、お母さんわかってくれるかな？」

「ああ、わかってくれるさ。じゃなかったら……」

親じゃないといおうとして妹にその先を止められた。

「お兄ちゃん。眠たちの両親はなにをやっている人？」

「医者だろ？」

「医者なんだよ。病気や怪我のスペシャリストなんだよ。こんな荒唐無稽で、空想世界的な力の存在なんて信じるわけがないよ。」

「そんなの言つて見なければわからないよ。そうだろ」

僕はやさしくさとそうとした。けれど妹は違うという何が違うのか。それはあんなに世界の病名を調べ上げて権威ある論文を読んでいる医者というものは、前例があるかないかで判断し自身の理解が及ばないことはしかも荒唐無稽なことは信じる免疫がないのではないかということ。しかもあんな必死に資料とにらめっこしている二人がそんな簡単に信じるだろうかというものだった。

確かにそれも一理ある。本当は答えがここにありました。不思議な力がいけないのです。

なんて普通の人なら信じない。しかも自分の利益を省みずに必死になつているあの親二人が落ち着いて電話口であの話の聞くとも思えない。実際にに会つのなら別だと思つが、何故なら僕だって電話口でこんな話されても信じないと思うから。実際に面と向かつてこそ見えてくるというのはあるかもしれない。でも、世界的名医であるあの二人をこちらに呼び戻す理由が空想世界の力によってでは無理だろう。きつと疲労とストレスでおかしくなつたと判断されて、余計無理して妹の病気を調べようとするだろう。何より情報の多いの世界という畑の中に答えがある。その方が有益であると判断するの

が可能性としてかなり高いかもしれない。じゃあどうするのか僕にはその答えがなかった。そんな僕に妹は再び僕に問いかける。

「お兄ちゃんは最後まで眠を見捨てず守ってくださいか。」

「もちろんだ」

「お兄ちゃんは眠が大好きですか」

「大好きです」

「どんな場所でも忍耐し、目的のために前進できますか」

「ああ、全力で前進してみせる」

「じゃあ、必ず帰ってきてくれますか」

「？」

どういうことだろう。僕はいつも自宅とこの病院を往復して今は学校は休みだけど、僕が終わったらいつもこの病院に来ている。帰ってきているといってもいいだろう。でも、妹はそんなことを聞いているわけではないようだ。どんなところにおいてもということだろうか？  
だったら答えは決まっている。

「どんな場所、時代背景にいたる場所であろうとも必ず帰ってきて見せる。」

そういつた瞬間僕の意味か暗転し閉ざされた。そんな薄れ行く意識

の中で聞いた妹の言葉は

「お兄ちゃん。ごめんなさい」

という泣きながらいう妹の姿だった。

## 妹の告白（後書き）

最後まで読んでくださり有難うございます。

まだまだ始まったばかりですが、感想 評価 下さればうれしく思います。

更新は書くのが遅いので日にちをあけると思いますが応援よろしく  
お願いします。

『天地無用!』の世界までの前準備(前書き)

二話めになります。

早くもお気に入り登録してくださる方がいてとてもうれしいです。  
がんばって書くのでよろしくお願いします。

『天地無用!』の世界までの前準備

「ここは何処だ」

それが僕こと藤崎おきるの一言目だった。だってそれを言うしかないんだもん。

宇宙空間っばいなということだけはわかるのだが、そんな場所にとら息ができるわけがないし、もしそうであれば一瞬で真空ということもあいまって窒息死、しかも真空状態の宇宙空間は常温であってもあつという間に水分など蒸発してしまつたため、生身のまま放出されたら体内の血液など沸騰して蒸発干からびたミイラにでもなつてしまう。でもそうなつていないということは、どうということなんだ？

というか妹が号泣してごめんなさいとか言っていたことがすごく気になる。この状態になるからごめんなさいなのか？ここにいれば妹は助かるのか？

「いったいどういふことなんジャー！」

とおもわず叫ぶ僕をきつと誰もが許してくれるだろう。そう思った瞬間

「しるさいにゃー」

という声とともに僕の頭の上に重たいものが振り落とされた。

「へっっ」

ものすごく痛い。

いつたいこの不届きものは誰だろう。

僕は妹が気がかりで、ほかの事を気にしている暇がないぐらい余裕がないのにも思いながらも原因たるものを見ようと顔をあげた。

「うしやー」

うん、目の前にうしやーと威嚇する猫がいました。モンハンのアイルーにそっくりです。機嫌が悪いみたいなんですが、そんなこと気にしたくないぐらいに今すぐ捕まえてお腹のやわらかくてあったかな毛をもふもふしたいです。何を隠そう僕は妹の次に猫が好きなくらい猫好きの自覚があります。もう我慢しなくてもいいよね？とりあえず僕は先ほど殴られたことも忘れて目の前の威嚇するアイルーを捕まえることにしました。

「ネコさんもふもふー」

「なんにやー、こわいにやー」

「何で逃げるんだよー」

「だって追いかけてくるみゃ」

「だって追いかけなきゃ捕まえられないじゃないかあ」

「捕まえなくていいみゃー」

というやり取りが無限に広がる大宇宙？で追いかけてつこが数時間にわたって行われた。

「はあ、はあ、はあ。いいかげんにするにや。もうつかれたみゃ。」

走れないにゃ」

「僕は猫たんにもふもふするまであきらめないぞ」

僕等みてのとりの満身創痍なんですがすみません。なんか僕楽しくなってきました。この状態をハイになったというそうですね。ああ、幸せです。しゃべる猫でしかもアイルーなんて最高じゃないですか！そして僕はついにアイルーを捕まえました。

「うにゃー。放すニャー。」

「もふもふですー」

「うにゃ、こそばゆいにゃ。どっこさわってるにゃ。にゃ、にゃ、にゃにゃー……」

しばらくお待ちください。

「汚されたにゃ」

アイルーのあんなによかった毛並みが今はぼさぼさになっている。なにかあったのだろうか？

「おいにゃ。お前がやったのにゃ。反省しろにゃ」

「あー癒された。ぬくぬくであったかくて、ふさふさで、もこもこで、最強なんじゃなかるうか」

僕は今いろんな意味でトリップ中です。

「むあー。聞けにゃ。この、おきる。なに僕に失礼なこととして一人だけ悦にひたってるにゃ。」

そんな僕に再び何か重いものが振り落とされた。

「この馬鹿、この馬鹿、この馬鹿みゃ」

「痛い、痛い、痛いです。でもかわいいです。最高です」

「もういいかげんにするにゃ。おきるお前は妹を助けたくないのかにゃ？せつかくいろいろと教えてから天地無用！の世界に移動させてあげようと思っていたのにゃ。そうしなくていいかにゃ」

「へ？どういこと」

僕はようやく妹という単語に目を覚ました。危なすぎるぜ猫ちゃんパワー。

とうにかさつき僕の名前言ってなかったか？教えた覚えはないんだけど。まあ猫ちゃんなら呼ばれてわるいきはしない。でへ、でへ、でへ。

「戻ってくるにゃこの馬鹿。この馬鹿、この馬鹿」

「またもや僕は重いもので殴られた。というかこの重いものはいったいなんなんだ。」

「肉球ハンマー攻撃だにゃ」

「そうですか肉球ですか。なんて甘美な響き、はっ、また重い物もとい肉球ハンマーで殴ろうとしている。地味に痛いのでかんべんしてください。」

「しょうがないにゃ。」

「やっと重くてかわいいハンマーをしまってくれた。僕は胸をなでおろす。それにしてもさっきからこのアイルーは僕の心を読んだように反応してきたり、僕の名前を言っていたりする。しかも妹のことを知っているといったどういうことだ？」

「それは、心を読めるからにゃ」

「心を読む。アイルーにはそんな力があつたのか、でもモンハンではそんな力はなかった。ある意味僕を殴る力はものすごく納得できるのだが」

「むーにゃ。殴る力のほかにあるのにゃしかも僕はゲームの中の猫じゃないにゃ。これはおきるのたためにとつてる姿に過ぎないにゃ」

「僕のために？」

「そうにゃ。僕は起きるの心を読めて。おきるの妹にその力の誤用は危険だと忠告できる存在にゃ」

「神様？」

「そんな高等なものじゃないにや。高位次元生命体といえいいかにや？」

「ん？そうなることやっぱり神になるんじや。行くのは天地無用！なんだろ？それをそのままあてはめるんだったら鷺羽とか津名魅とか、あとは訪希深？創生の三女神って設定ではなっっていなかったっけ？」

「設定はそうだけど違うにや。その世界の住人はそう解釈しているものも多にいるし、実際神のような力と考える力はあるけれどぜんぜん違うにや。そもそも神様は自分勝手だったり、あるひとつの種族のみをひいきなんかしないにや。それに見合った力をお使いになるにや。よって高位次元生命体というのは力がある駄々の人にや。まあけれどこの世界の高位次元生命体はその力を使って世界の安定にきをつかって生きてはいるんだだけにや」

「それで僕の心が読めて妹に警告を出せる力があるということなのか」

「そういうことにやね。それとくわえるならば、ここに藤崎おきるをつれてきたのも僕にや」

「なんだと！ということとは妹を眠を泣かしたのはお前か」

「な、何でそうなるにや。僕はただ解決策をおきるの妹に教えてあげただけにや。それにもなっっておきるの力が必要だったからここによんだのにや」

「なーんだ。早くってよそういう大切なことはさ」

妹を助けられるんだったらばんざいだ。

だから最後に妹は僕に覚悟をすべきこととして、思いにとめておくこととして、問いかけてきたんだな。と僕は思った。これは覚悟をもう一度決めなければならぬなと僕は気持ちを入れかけることにしてアイルーの話を聞くことにした。

「やっつと。おきるの真剣な顔を見れたにや。それにしても、さつきから重要なことだとしていつているのにおきるは、もふもふ、もふもふ僕をいじくるし、トリップするし、ハンマーでたたかないと元に戻らないしで踏んだり蹴ったりにや」

「う、ごめん。」

まさにそのとおりです。何の反論もできません。僕は思わずということから頭をさげた。

「じゃあ、今度はしつかり聞くにや。おきるの妹眠を助ける方法はずばり、この天地無用！の世界とつながってしまっている眠のパスをきることにや。何故にやらば、いま眠は天地無用！の世界に眠の意志が定着して綱引きをしている状態になって、ある意味体が引き裂かれそうになっている状態に陥っているからだにや」

「まさに妹の言っていたとおりのことが妹の体におきているということか。でも、引き裂かれそうってしやれにならないだろ！あーでも何で天地無用！の世界なんだ？というか妹が言っていたそのパス？を切りたいのはやまやまだけどどうやって？パスが切れなくなってる状態だから綱引きしているんだろ？」

僕は、両手で頭をくしゃくしゃとして体を丸くし、しやがみこんだ。

解決策ってどうするんだよ！と思いつながら。すると、アイルーはあわてたように駆け寄り僕の背をさすってくれた。

「落ち着くにゃ。そんないつぺんに答えられないにゃ。まず何で天地無用！の世界かというのそれは眠がここ最近はずっと世界だからにゃ。簡単に言えば大好きな作品だからといえはいかにゃ？そしてその作品の世界が実際にあるということがその世界にいかなければならぬひとつの理由にゃ。だからこそパスが繋がったしまったんだけどにゃ。つまりは、眠にそういう力があるってことで、今回はそれがうまく機能しなくなってしまったために、眠は体が悪くなる事態が起きてしまったということなんだにゃ。で、肝心のどうやってパスを切るかだけにゃ？考えても見るにゃ。僕が何のためにおきるをここに呼んだかということにゃ。つまりはそのファクターが抜けているということにゃ」

「？抜けているファクターってことは、僕ならそれが解決出るってこと？」

僕の目の前に希望が現れたきがした。そんな僕を強めるようにアイルーは僕に言う。

「そうにゃ。この『天地無用！』の世界に散らばる眠の目線につながるパスをきつていくのにゃ。その役割はおきるにしかできないにゃ。何故なら。妹にもっとも近しく関係が深くなければ妹のパスが何処の誰につながっているかわからないからにゃ」

でもアイルーのその言葉はととてもとても難しい答えだった。僕はあせってアイルーに聞いた。だした。

「ちょっとまって。パスを見つめる。それを切る。まではいい。け

れどどれくらいこの世界の住人がいるともってるんだ！無理だろう。そこからつながっているパスを一本探すなんて。しかもそのパスが人にくつついているとはかぎらないだろう。もしかしたら珍しくめつたに顔を見せない貴重種である動物かもしれないじゃないか」

「そおにゃ。でも、おきるは眠といままでいるんなお話をしてきたみや。そこで出てくる登場人物のちかくにかならずパスがあるはずだにゃ。それを思い出していけば必ず答えに行きつくはずだにゃ。それとパスの本数について勘違いしているから言っとくにゃ。一本じゃないにゃ。本数は複数にゃ。しかもおきるにしか知覚できないから本数は不明にゃ。」

でも、時間はあるにゃあせらずゆっくり探すにゃ」

そのアイルーの言葉に僕は啞然とした。何故つて。パスは複数だということだしかも不明つて。時間あるつてどれくらいだよちくしよつう。

「確かに『天地無用！』の世界の寿命は馬鹿みたいに長くて時間は関係ないだろうさ。ある意味無限といつてもいいかもしれない。だけど僕や妹は有限なんだよ。100年生きているかもわからないね。そんなかで、複数のパスつて。いくら妹の話に手がかりがあるつて言つてもこれが終わった時はよぼよぼの爺さんなんかいやだぞ。しかも、妹の病気の悪化で妹がすでに死んでましたなんていつたら僕は自分が許せなくて死んでしまうよ。」

僕は何度絶望のふちに立てばいいのか。僕は完全にうなだれてひざをついた。それを励まそうとしてなのかアイルーは僕の背を抱きしめて語りかけた。

「大丈夫だにゃ。おきるも改造手術をこの世界で受ければいいにゃ。」

それにすべてのパスが切り終わったら、飛ばされた時間から一週間後に飛ばされたときの歳にして戻すことが可能にや。しかも改造手術の痕跡なく普通の人としてにや。」

それを聞いて僕は心底安心した。

「ああ、よかった。パスが赤ということ。それは妹が見た夢に登場してきた登場人物たちの周囲であること。これさえわかれば、あとはどうにかなるな。」

僕は希望が見えた気がした。

「やるきがでてきたかにや？」

「ああ、つまりは物語の主要人物と積極的にかかわっていけばいいんだろ……ん？ どうやって？」

「大丈夫だにや。そのてんはアフターサービスばっちりにとくにや。」

「どんな？」

僕は興味深そうにイルーにたずねた。だってこれすごい重要だろう？しかもあの樹雷の鬼姫とかかわるには何か知らないと目もかけてくれないだろうからな。というか、実際に会うこともできないだろう。アニメとかではじつに頻繁に主人公と関係を持ち登場してくるキャラクターであるが、考えても見てくれ。王様や最高権力者が会いたいですといってそう簡単に合えるだろうかと。つまりはそれに見合う才能なり能力なりが評価されなければ謁見すらできないだ

ろう。それではこの場合。パスを見つけることが非常に困難になる  
といわざる終えないだろう。何故なら妹の夢にあの神木瀬戸樹雷が  
実によく出てきたのだ。絶対この周辺にパスがあるに決まっている。  
そんな僕の思考を高位次元生命体の力でまたもよんだのか、おもむ  
るに銀色のカードを三枚をある一部の空間をゆがめてアイルーは取  
り出した。

「このカードはおきるにさまざまな技能を付与することのできるカ  
ードで、おまけつきにや」

「なるほど。それで僕に物語の登場人物にかかわれるような能力を  
つけようってこと？」

「そういうことにや。それにくわえて僕は生き抜くためにとある能  
力を授けようと思うにや。それは、ゲームでおなじみ自身のステ  
ータス確認ができる能力にや」

「それって、何の得が？」

「むーにや。いまやくにたたねーって思ったにやね。馬鹿にしない  
でほしいにや。これはものすごい能力にや。今それを教えてやるか  
ら黙って口チャックだにや」

「わ、わっかたよ。じゃあおしえてくれる？」

いまは、だまっていようと僕は決めた。だって、今はこれを聞かな  
ければ後で大変になると思うから。実際何の説明書も見ないのでゲ  
ーム攻略は難しい。格闘ゲームだったらいつまでたっても必殺コマ  
ンドが出せないって状況を言えば理解できると思う。だから僕は姿  
勢を正してアイルーがこれから話すことを忘れないようにしようと

心に決めた。

「うんにゃ。いいところがけにゃ」

「また心をよんだのか。まあもついいや。早く教えて」

「よしにゃ。このステータス確認は自身の肉体データ筋力とか頭の回転率IQとでも言うかにゃそれなどを確認できたり。今どんな病気を患っているか、どの筋肉骨内臓の調子が悪いまでわかる優れものにゃ。それにくわえて、おきるが習得した技能の習得ランクやレベルアップにいたる方法など、丁寧におきるがどうやって最速でその技能のマスターランクまでいけるか逐一わかるようになってるにゃ。しかもそれだけじゃないにゃ。レベルアップ制度を適用しているからそのたびにもらえるポイントを各種ステータス、技能に割り振ることがゲームのように可能になっているにゃ。しかもその割り振ったポイントはいつでも割り振りなおすことが可能にゃ。どうにゃ。すごいにゃろ」

「ある意味でチートだな。」

「でもこれぐらいしなきゃ。あの世界で少し何かの技能に優れていたらからといって物語の主要人物たちにかかわっていくのはむりにゃ。それにいきなりものすごい力を備えていたりするとよってこなくていいものがよってきて大変になるにゃ。だからバランスを取れるようにしてみたにゃ」

「有難う。すなおに礼をいっておくよ。で、そのカードはどう使えばいい」

「このカードにこの羽ペンにインクをつけて書けばその技能の能力

がレベルーから開放するにゃ」

「レベルーからか。」

少し残念である。まあ、どうすればこの体で頂点へいけるのかわかるといふのだからどうにかなるだろう。でも、時間かかるなーどうやら妹に会えるのは先が長そつだ。そう思う僕になにやら意味深な笑みを向けるアイルー。

「なんだよ。何か言いたいことがあるんだつたらいえよ」

「にゃはは、そんなに苦労しなきゃとかいっつかおがせつな過ぎて面白かつただけにゃ」

「面白いはひどいな。だつてそう思うだろ？ 苦労しなきゃレベルは上がらないんだから。そうでなければ物語りにかかわれないよつて編もうと似合えない時間ながびくそうだろ？」

「おきるは、僕の話ちゃんと聞いてたかにゃそのカードにはおまけがついているとさつき言わなかったかにゃ？」

「そついえば、そのおまけつて」

それを聴いた瞬間僕の心がはねた。それは妹を早く救える期待か希望家のどちらかだろう。

「さーお楽しみの発表にゃ。それは、レベルアップ時にもらえるポーンポイントカード一枚につき五百ポイント贈呈という得点にゃ。これで初めから技能マックスを五つ増やすことも夢ではないにゃ」

「と、言うことはひとつのマスターポイントまでの値は100ということか」

「そういうことにや。でも例外があるにや。それはその技能に対して才能があればマックスになるまでのポイントは低くなるにやたとえばマックスの値100からマイナス20とかにや。」

「そうするとマックスが80になると。ということは才能がない技能はそれ以上にプラス補正がかかるということか」

「そういうことにや。困難なほどポイントが必要にや。ちなみに身体能力ポイントは、その肉体で鍛えられる限界値をマスターと定義されているにや。」

「なるほどね。わからりやすい。じゃあこのカードになんて書くかな。」

「そうにやね。よく考えて書くにや取り消しはできないにや。そうだ、机と椅子を出してあげるにや地べたに座って羽ペンにインクつけてはナンセンスだにや」

「有難う」

僕はそう言うとアイルーが用意してくれた椅子にすわりどんな技能がいいのか考え始めた。

「ねえ、アドバイスとかない？」

「そうにやねー。肉体関係はナノマシンによる改造が受けれるからそんなにポイントは振らなくてもいいんじゃないかということか

にや。だから技能にポイントを振ることをお勧めするにや。あとはカードに何を書くかについてにやけどそれは任せるにや何を書いてもいいとしかいえないにや。あとすでに持っているスキルはそのカードにかけないにや。だから注意するにや」

と、いうことらしい。本当にどうしよう。まあ、まずは自分の持つ技能というものを確認してみますか

「ねえ、ステータスは今確認できるかな？」

「もちろんにや。ステータスと心の中に思い浮かべれば目の前に表示されるにやちなみにその画面はおきるにしか見えないにや。あとは僕くらいにや。そのほかのたとえば創生の三女神でも見えないから安心するにや」

「サンキュ」

えっとまずはステータスだな。でろ、ステータス

総合レベル：15

肉体レベル：今現在の肉体の限界数値マックス100のうち現在20  
ひ弱

IQレベル：これに関しては実際の知能指数を基にした数値を記載する。一ポイントは0.5あげるものとする。現在のIQ値 90  
普通 悪くもなくよくもない。一般人同等ねべる。

おーでてきた。肉体レベルひ弱つて。まあそうだけども。頭の良さはまあそのとおりだな。テストもクラスで真ん中くらいの平均レベルだったし。

それで、肝心の技能は……日本人の標準持っているであろうスキルしかないな。

たとえば、日本語とかでもこれマックスじゃないってどういうこと？100のうち70しかないんだけど。確かに知らないかけない漢字があるのは確かだし語彙がすくない……。こらは確かに他人には見せられないな。何かないのかボーナスでもらったポイントを割り振るべき能力は。お、流行でよんだ速読術の本が少しだけ役に立ったか、速読マックス100のうち2とは。まああるだけいいか。ん？そういえばこのスキル開放は技能に目覚めたときから始まるのだろう。だは数値を割り振りなおすときいらなとしてスキルのポイントを0にしたらどうなるんだ？

「なくなるにや」

「なくなる？」

「そうにやまた初めから苦勞してレベル1を手に入れる必要があるにや。これ言い忘れてたにやけど1ポイント当たりレベル1に該当するにやから覚えとくにや」

「あーきいてよかった。それすごく大事なことじゃない」

「すまんにやでもこれでもついい忘れとかにやいはずだから落ち着いて書くにや」

「わかったよ」

さて、マックスにするものは速読術とかにしようかな？後はIQとかか？肉体は改造できるって言うてたし。まあでもそれはこのカードに能力もとい技能を書いてからにしよう。きつとこれが物語りにかかわることのできるキーになるはずだ。何にしよう。なやむな！なやむ。そのとき僕の頭に天啓がひらめいた。人類とか書けばすべてのスキルが開放されるんじゃない？わー僕ってずるがしこいー

「だめにゃ」

案の定僕の思考を読む猫に却下されました。そうですねだめですよ。そんなの基本ですよ。

「そうじゃないにゃ。スキルが多すぎてきつとおきるの脳が耐えられなくなるにゃ」

「そういうことですか」

「そういうことにゃ。いくらレベル1でも多すぎればそれだけ負担になるにゃ。他はないのかにゃ？」

ほかの？僕は考える。目の前の猫は笑っている。これは何かあるな。きつと何か抜け道があるはずだ。しかもそれを笑ってみているだけということは、答えに行き着けばよし。そうでなければ教ええないそういうことなんだろう。禁則事項ですみたいなことなんだろうせ？まあいい。何かないか何か。あんな人外たち、たちといっても飛びつきりのは限られてはいるが、人外を相手にするにはいったいどうしたら、ん？人外？少ない？ということとは

「答えに行き着いたようにゃね。これで眠を救うことのできる確立

がかなりあがったにや。時間はたくさんあるといつても。制限時間がないわけじゃないからにや」

「ど、どういうことだ」

僕はおもわづアイルーの胸倉をつかんだ。

「苦しいにや。おちつけにや。」

「だって、だって、すべて解決したら飛ばされた時から一週間後に戻してくれるんだろ？そういったよな」

「言ったにやだけど。制限時間がなしと入ってないにや。とりあえず放すにやせつめいしてにやるから」

「わかった。でもくだらない理由だけはいわないでくれよ。でなければ僕は自分を抑えられない」

「大丈夫だにや。その理由は大切でおきるが元の世界にかえるためにかかせないものであり。命綱であるものなのだから。それこそ。妹からのパスにや」

「僕に妹からのパスがついているだって。まじか、冗談はやめてくれそれを切るために俺が異世界にわたるって言うのにながってるって。妹のふたんになるだけじゃないか。いますぐ切るにはどうしたらいい猫」

僕がこんな猫に愛すべき猫にこんな態度をとったのは初めてだ。だが妹のことであればさらに命がかかっているのなら自分の好きなものなどどうでもいい。そんなどすを聞かせて迫る僕に何も答ええない

猫。僕は腹が立ち自分でどうにかして切ろうとしてつながっているパスを探した。

「あつた」

それは背中の中の中央から生えていた。色は赤。太く綱引きのときに使うような丈夫さが感じられるそんなあパスであつた。

これが妹をくるしめるパスなのだろう。僕は勢いよく引き抜こうとした。

その瞬間！

それをとめるようにいつから僕の傍らに立ったのか、アイルはすばやく僕に近寄ると戒めるように強く僕の手を握り、爪を立てた。血が流れる。

いたい。

だけれどいまはそれどころではない。早く断ち切らねばいもうつとのパスを！

そんな暴れる僕に猫はさとすように問いかけ始めた。

「本当に切るのかにや妹とのパスを、たしかにこのまま君の意志があれば簡単にどんな眠のパスでも触れて引っこ抜けばパスは切れるにや。でも、それでいいのかにや？」

「だって切らなきゃ妹が苦しい目にあうだろう」

「たしかにそうにや。パスがあるほど眠は苦しいにや。けれどそれがなければ君は元の世界に返れないにや。」

「それでも、いもうとが楽になるなら」

「君は妹と何を約束したにや」

「妹と？」

「そうにや。思い出すにや。別れぎわの彼女とのやくそくを」

ああ、そうだ。

どんな困難があっても決してあきらめず前進すると誓った。  
必ず帰ると誓った。

それを破ることは兄として、男として、許されるものじゃない。  
じゃあどうすればいいんだこのパスを僕は……。

「受け入れるにや。その太い綱は妹との絆の強さを意味しているにや。これから君が切っていくパスは糸や毛糸ほどじゃないはずだにや。数はどれくらいあるか検討もつかないけれど。その中で一番つながっているのはきみにゃんだよ。おきる。その意味を考えて強くなるにや」

「君にはかなわないな。そのとおりだ。これは僕と妹が生きた証、切るなんてありえない。」

僕は少し冷静になろうと深く深く深呼吸した。一番重要なことを聞かなければ。さあ僕はクールだ。

「で、アイルー。パスが制限時間とどう関係するんだ？僕はそれを一番心配している。」

「いいにや、おしえるにや。制限時間の理由にゃね。それは眠の力が弱くなっているということにゃんだ。眠は自分の力を使ってパス

をつなげすぎてるにや。もはや二度と昔にみたいに世界に一時的にパスをつなげて覗き見ることができないぐらいに、もしすべてのパスを切る前に眠の力が尽きて君と眠との関係が切れてしまったら、おきるはもはや元の世界には返れないし、他の人につながっているパスを見つけて切る力もなくなってしまふ。それによって、眠はずっとパスによつて引つ張られ、ついには衰弱して死ぬ。眠の力がなくなった。一週間後ぐらいにね。よつて眠の限界が一週間。この『天地無用!』の世界時間で70年の時間しかないということなんだよ。だから、七十年後の一月一日がタイムリミットにや」

「だから、時間があるつていったんだな。そして制限時間があるとも。でも、天地の世界からすれば70年は短いな」

「だろ、気をつける必要があるつてことにや。」

「そういうことが、わかったよ。アイルー。じゃあ、これを受理してくれ。」

僕はカードの一枚に「人外」と書いてアイルーに渡した。

「おーけーにや。残りのカードは使わなかったからポイント還元するかにや?」

「できるの? そうであればしてほしい、どれくらいになりそうかな?」

「使わなかったから。二枚で2000ポイントでいいにやよ。」

「そんなに?」

「うん。僕も君とは短い付き合いだけど、友達だと思ってるからにや。」

「それはうれしいな。ポッケポイントならぬ友達ポイントということだね?」

「そうにや! それにいま増えた技能をステータスで見てもらえばわかると思うけど人外の能力はポイントを馬鹿みたいに使うからにやね。君にその技能の片鱗、才能みたいなのがあれば、その数値はいくらか下がるけどたいていは無理だからね。」

「わかったよ。ありがとう。たすかったよ。」

「お礼はもういにや。はやくポイント割り振って妹助けるにや。」

「ああ、そうさせてもらう。」

そういつて僕は頭を抱えながらもポイントをどうにか振り終えた。でも、初め見たとき驚いたのが……  
ネージュ・ナ・メルマスの能力とかしゃれにならないものから、天地の樹雷の木なしで光鷹翼をだす能力とかのレベル1とかステータス欄にあった。山田西南のまき込まれの不幸側の能力とか天南静竜の幸運とか、これ二つで相殺できるんじゃない?なんてものまであった。ああこうなったら。ケセラセラ、なるようになるさ。  
とりあえず僕は、この『天地無用!』の重要なファクターである皇家の樹にかかわる能力をあげることにした。

いつでもポイント移動できるしね。

それに僕はどうやら植物とか動物に好かれる才能があるらしい。そんなに木に関するポイントは使わなくてもよさそうだ。それは他の人外の能力に比べてということなのだが。ちなみに皇家の樹との精

神レベルでの意思疎通の能力値がマックス300だった。これはかなりいいのではないだろうか？

他は1000とか2000とか普通にあって、特にネージユ・ナ・メルマスがやばい。さすが幼生固定されて宗教国家メルマスで厳重な監視下のもと、あまり外に出れず籠の鳥状態にされていただけの力だけはある。この能力だけは絶対のばすわけにはいかないなど、すごく思った。

というかこの能力消したいぐらいである。でもなぜか消せない。呪いか？呪いなのか？

そのことについてアイルーに聞いたけど、すこしでも才能があるからなんじゃない？とかいって冗談にならないことをいって誤魔化すしまつ。いったいどういうことなんだ？

世界に飛んだ瞬間、籠の鳥なんか冗談じゃないぞ。僕には七十年しかないのだ。

まあ、その点についてはこれ以上ネージユの能力をのばさなければ大丈夫なんじゃないというアイルーの言葉を信じることにする。

そうして僕は残ったポイントをすべてIQにとりあえず追加し、ポイントをすべて振り終えた。

今現在の特筆すべき藤崎おきるの能力。

樹雷のき全般との意識化（心で知覚有しているときの状態）でのコミュニケーション能力

口にしなくても携帯電話のように会話できるという技能。距離はレベルによって変化する。

藤崎おきるは、マックスポイント300まであげたので距離による生涯はないものとする。だが、最低でも実際に一回でも皇家の樹にあってコミュニケーションをとる必要がある。

そして、IQ90のところポイント補正が入り、2200ポイント

使用したことにより。

1100IQの上昇。よって藤崎おきるのIQ1190とする。

頭だけ異様によくなったな僕。でも、1190っていわれても回転が速くなっただけで、知識がないからいまいち体感が感じられないんだけど、まあいいか。天地無用！の世界はどちらかといえば肉体チートは改造手術であげられても頭のほうはそうでもなかったはず。僕はとりあえずのポイントの割り振りに満足しつつ。準備が終わったと、アイルーに向き直った。

「じゃあいいかじゃ？飛ばすじゃ」

「だいじょうぶ。不安はあるけど、僕には妹とのパスがあるからね。」

「いい目じゃ。じゃ、重要なことの最終確認じゃ。眠がつなげてしまっているパスの本数は不明。それは、おきるしか知覚できないという理由からじゃ。切るときはそのパスにさわり引っこ抜けばいいじゃ。わかつているかにゃ？」

「そうだよな。僕しか知覚できないだよな。大丈夫、僕が自分のパスを引きぬこうとしたとき散々諭してくれただろ？あきらめずに前に進んで残らずパスを切っていくさ」

「じゃあ、心配にゃいね。いってらっしゃいじゃ」

「いってきます。ありがとう信頼すべき一番の僕の友達」

僕はこの短い時間ながらも僕等兄妹のことを思って助言しあまつさ

え力まで与えてくれた。高位次元生命体もといアイルーいや友に精一杯のお礼とともに頭を下げた。そうして僕はこの世界『天地無用!』の世界とかかわるべく異世界に飛ばされた。すべてのパスをきってみせると思いながら。

船穂「ようこそ。異世界からの旅人よ」



『天地無用!』の世界までの前準備(後書き)

最後まで読んでいただき有難うございます。

よければ感想 評価お願いします。

次回から天地無用!の世界で主人公が活躍するさまをみなさんにお届けできると思います。

## 船穂から始まる。僕の初め（前書き）

二話ですが、おかしい言葉はこびが見受けられたので修正をさせていただきました。

この三話も直すところがあるかもしれませんが、定期的にチェックして気づきしだい直していこうと思っています。  
では、お待たせしました。三話をどうぞ。

## 船穂から始まる。僕の初め

船穂「ようこそいらっしやいました。異世界からの旅人よ」

そう僕は今、地球に根付く皇家の木「船穂」の前にいた。

「初めして、船穂さん。僕の名前は藤崎おきるといいます」

「私とこんなにお話できるなんて、私の主になった者以外に初めてです。しかも、こんなにはつきりしし疎通できるなんて、あなたはそういう力があるんですね。私の名前は船穂、知っていたようですがあのネコさんのかっこをした高位次元生命体の方に聞いたんですか？」

あのアイルー。

アフターサービスとか言っただけじゃなくて船穂に話をしておいてくれたのかな？

違ったら困るし、とりあえず話をあわした上で聞いてみよう。

僕は顔を上げ船穂さんを見上げるようにして彼女の問いに答えた。

「そのとおりです。(アニメに出てましたなんていえないからこれでいいか)あなたは僕のことをなにかあの猫から聞いていますか？」

「この少年のことをよろしく！ といっただけで去っていききましたから特に詳しいことは聞いていません。それと、こうもいってましたね。この世界の高位次元生命体に僕の姿を見られたらやばいから内緒だよ。とかなんとか。なので私はしゃべるつもりはありませんから、あなたの秘密もはなしませんよ。それにこの世界の三人の女神であってもネコさんにもらったプロテクトをかけるつもりです」

から、あなたも言っただけでほしくないのであれば秘密にしますし、言いたくなければ聞きません」

そんな言葉を聴くことができ、僕は始めての世界でも信頼できるものに会えてよかったと心底思った。

本当に僕の愛する猫さままである。

なんだかんだでアフターサービスばっちりしてくれているようだ。初めに船穂さんに会うことができたのは正解である。

「船穂さん有難う。なんだかんだで僕の近くに事情を理解してくれる誰かがいてほしかったんだ。とても心強いよ。」

そういつて、僕は妹のことでやるべきことがあること、パスの話にいたるすべてを、皇家の木である船穂さんに語った。

これで肩の荷が少し軽くなったというものだ。本当に……そうしてすべてを聴き終えた船穂さんは僕にこういつた。

「大変でしたね。私もできる限り手伝いましょう。といつても私はここから動けないので。ほんの少し私の力を使えるようにするくらいしかできないのですが。」

「十分すぎるよ船穂さん」

「でもあなたに謝らなければならないことがあります。私の力とリンクできるのは本来なら今の主である遙照だけなのです。ですから主でないかぎり長距離での力のリンクの維持はできないのです。よつて、地球のから月までの距離約38万4400kmもちろん地球を支点としての考えですから。直径距離は38万4400kmのかける2倍計算ですから76万8800kmということになりますね。つまりはそれが限界距離空間であるとお教えしなければなりません。」

「そうなのか、でもそれだけでも十分だよ。それに今はこの地球にこそようがあるからね。それまではよろしくたむよ、船穂さん」

「ええ、よろこんで。では最初の手助けをしたいと思いますが、いかがですか？」

「本当？うれしいな。ぜひお願いするよ。」

「では、こほん。この山のふきんには、私の主のいる榎木神社があの宮司をしています。その孫である天地という者の家もあります。先ほど聞かせていただいたことから察するに、今あなたが一番見つけたいものが近くにあるはずですよ。道案内は私がリンクすることに、この辺いったいの見取り図をおきるの頭の中に送ります。それでひとまずは問題ないでしょう。それと、おきるはこの世界のお金をもっていますか？」

「いや、そういえば一銭ももっていないよ。ここへは身一つできたものだから、いろいろありすぎてそのこと何も考えてなかったな。そうだよな、僕はここで生活しながら妹のパスを差がなきゃいけないんだ。何か仕事でも見つけられないかな。でも、この世界の戸籍とか本と何も持ってないから、はは、どうしよ。」

僕の妹を救うライフ（生活）はただいまをもって終了しそうな勢いです。

不思議能力があっても、肝心なものが無ければ生きていくのもままなりません。

そんな、おろおろとするしかない僕をよそに船穂さんは笑う。

僕のいまの姿は確かにこっけいだけれど、笑わなくてもいいじゃない

いか。と僕がそういうと船穂は

「ごめんなさい」

といい。でも相当、僕が慌て落ち込む姿がおかしかったのか、僕の頭の中にしばらくの間笑い声が響き続けた。やっと、響かなくなったのをまって僕は船穂さんに声をかけた。

「はあ、船穂さんおつついた？」

「ええ、すいません。あまりにもあなたがかわいくて、笑ってしまいました。あなたは何か事件があったらそれにしか目が向かなくなるタイプですか？」

「かわいいですか、こっけいではなくてそうきましたか、でも、言い返せません。かわいいのはべつにしても僕は、本当に何も持っていないのです。ちょっと特殊な力を持っているぐらいで、それ以外何も持っていません。船穂さん、生活できません。なので、助けてください。」

僕は素直に助けを求めることにした。

「潔い人は私の好みですよ」

「これは、有難うといったほうがいいのか？」

さつき笑われたことがきになってすこし意地悪くなってしまうのはご愛嬌でゆるしてほしい。

そんな僕の感情を読み取ったのか、苦笑して船穂さんは再び僕に問いかけた。

「いいですよ。そんなことは、それよりあなたにこれをあげましよう。きつとこれで当分困らないと思いますよ」

そういうと、船穂さんは僕の目の前の次元をゆがめ、僕の前にひとつの実を念力のような力なのか？それによって浮かばせ、手に取るように僕に促した。

それはとても大きく僕の頭ぐらいあり、薰り高く、実の色はオレンジに近い黄色であった。

「その実は私が去年実をつけた際にとっておいたものです。この星では売れませんが、宇宙に出ればそれなりに値段がつくでしょう。それによってさまざまな星系に存在する貨幣へとかえることができます。とおもいます。」

これは、思わぬ贈り物だ、皇家の実はあまりならない。それによって貴重価値がものすごく高い天地無用！で有名な果実だ。その実を使ったお酒やジュースは確か規模は小さくても星ひとつ買える値がついたはず、いくつもの実を使うお酒や実ほどの値はつかないだろうが、きつと普通に暮らすなら僕のタイムリミット70年は困らないだろう。もしかしたらもっと持つかもしれない。これで金の心配はなくなった。けれど、僕にはひとつの疑問が浮かんだ。

「ねえ、船穂さん。この実有難う。でも、宇宙の何処に売りにいけばこれ、お金にかえられるのかな？あと宇宙まではどうやっていけばいいのかな？」

そうなのである。今ほしいのは現金であり、ものではない。売る場所がわかってても、今すぐいけなければ、その価値を見出すには時間がかかるだろう。

しかも、その場所まで行く手段が無ければさらに現金を手に入れることはもはや絶望的であろう。

現在できることは、目の前の皇家の実を食べ今日の一食分をどうにかすることができぐらいである。でも、そんなことはもつたいなくともできない。人これは「つんだ」という。やっぱり僕のライフはここで終わるのか……。

「そんな心配そんな顔しないでください」

そんな、絶望のふちに足をかけたもののような顔をして（船穂談）いたものだから船穂があせったように僕に問いかけてきた。

「ここでの生活に関しては私の主、遙照にどうにかしてもらいましょう。それにその実を見せるだけできつとあの方はどうにかしてくれると思いますよ。それと売り方ですが、それも遙照にまかせてしまってもいいかもしれませんね。働き口なんかは、そのとき聞いてもいいかもしれません。戸籍関係もそれでどうにかなると思います。おきるがG P 銀河警察に所属するのであれば、遙照の奥様である榎木アイリさんや九羅密美守さんを通して私の実を売ることができるとおもいます。それとこれは気おつけてほしいのですが、決して自分ひとりで誰とも知れない人物にその実を売るのは任せてはいけないということですよ。樹雷のかたならすぐに対応できると思います。が、へんなやつかみや感情をもつかたがないとも限りませんし、詐欺に会う可能性や、巻き込まれなくてもいい事件に巻き込まれる可能性が物が物だけに予想されます。私個人としてはそんな貴重なものという認識はないんですけどね。私が貴重とするのは、私のわが子になる種ぐらいなんです。まあそれはそれとして、あとは最悪樹雷の瀬戸様に見せれば引き取ってくれると思います。というか、引きとらざるおえないと思いますけど。まあ、そのときはどちらの選択肢を選ぶにしてもひと悶着ありそうですが、まあ、たぶん……

・・・大丈夫ですよ。」

「たぶんって、はあ、まあいいや。もうここはケセラセラどうにか  
なると腹をくくるよ。とりあえずは安全策で君の主である遙照って  
言う人にどうにかしてもらっさ。で？僕はこれからどうしたらいい  
？」

「まずは、私の主をあなたのももとへ向かわせますね。おきるは天  
地の家のほうがここから近いのでそこでまっついていてください。」

「わかったよ。何から何まで有難う。」

「いえいえ、私も主以外でこんなに人とはなせてよかったです。貴  
重な体験でしたよ。それから最後にアドバイスとしてご自身のこの  
世界に来た理由、高位次元生命体の猫さんのことは言わないほうが  
いいかもしれませんが、それ以外なら信頼における人に話しておい  
て損がないと思いますよ。それが、この世界の有力な人物というな  
らなおさら」

「わかったよ。そうだな、信じてくれると思う人に話すとするさ。  
じゃ、これからよろしく」

「ええ、おきる。いってらっしゃい」

「いってきます」

こうして僕は船穂さんが頭に入れてくれた地図のもと、船穂さんの支持にしたがって、にんじん畑がありすぎる畑を通り、大きな池があるそばの天地の家に急いだ。

ああ、そいえばあの丸太みたいな口ボがあるんだっけ。本物が見れるとは感慨深いな。

……らくがきしてみたいな。

## 船穂から始まる。僕の初め（後書き）

最後まで読んでくださり有難うございます。

できれば感想 評価お願いたします。

天地の設定のなかで、物語上で出ていないものはなるべく設定どうりにしたいと思っていますが、出ていないものは、独自設定をいれて執筆したいと思っています。では、次の話をお持ちください。

## 雨音・カウナックとの出会い始めのターン（前書き）

着実にこの小説を読んでくれる人たちが増えてきていることをしつてうれしい限りです。では、四話をどうぞ。

## 雨音・カウナツクとの出会い始めのターン

きた、来ましたよ。

あの門柱を演じる阿座化、火美猛いま目の前に！

ちなみに体に書かれている字が青い方が阿座化、赤い方が火美猛であつたはず。

昔からアニメをみていて思ったのだが、このロボはうまく門柱に化けているつもりだろうがどう見ても異質な柱である。生で見るとなをそつみえる。

まあそれはいい、マジックがここにあれば本当に落書きでもしてみるのが、今それは無い。

しょうがないからくすぐるだけにしよう。そうだな、赤色が好きだから火美猛にしようか。

こしょこしょこしょ。ふむ、一瞬レンズのよな物が光ったような気がしたのだが気のせいか？

「気のせいじゃないですよ」

おっと船穂さんの声が頭に響いてきた。そういえば、船穂さんのテリトリー内にいるうちはリンクした状態なんだった。

それにしても気のせいじゃないって、やはりこの門柱はなりきれないな。

「今くすぐったからですよ」

「でも、これ硬いし触覚って機能しているの？」

「くすぐったかった。というよりも、怪しい行動をされたので一瞬防衛機能が動いた。という感じでしょう。でもただの気のせいと割

り切ってまた門柱になったようなので、心配はいりません」

「はは、そうか、まあ気のせいということにしてくれただなら心配も無いな。この二体のメカに妹のパスはついていないみたいだし、本格的に怪しまれるまえにさっさと天地の家に行きますか。」

「ふふ、そうですね。そうしてください。普通じゃない者と認識されたらさすがにこの二体が動きますからね。でも私が力を貸しているあいだはたいいていの武力を無力化して見せますから大丈夫なんですけどね。まあ、それも人外指定されたものでなければの話ですが」

「確かに、人外じゃしょうがない。じゃ、その人外指定がたくさんいるところにお邪魔しますかね。」

「みな良い方ですよ。心配はいりません。いま目の前に見えている家がそうですね」

「了解」

僕は大きいあの豪邸ともいえる場所へ足をすすめた。

家のそばには大きい池があり、さっきここまで来るのに通ったにんじん畑の土地面積を考え見るに、というか、所有している山とか神社とか、あわしたらいったいどれほどの地主なんだろう。

しかもそれ以外にこの地球で宇宙に連なる人は榎木家に連なる村という単位で扱われているこの世界において、改めて思ったことは、宇宙でも偏狭でも榎木家の力は強いということだ。

それだけそういう人物たちとこれから生活していかねばならない僕にとってこの先の困難が見えた気がした。

そうこうしているうちに榎木家の玄関前に着いた。

「ついたけど、船穂さんどうすればいい？」

「そうですね。中で待たせてもらいましょう。今は誰もいな、いえ白眉鷺羽殿がいるようですね。ですが今は研究室にこもっているようです。とりあえずは私の主がくるまでは接触を避けたほうがいいでしょうね。好奇心旺盛な白眉鷺羽殿のことですから何かひと悶着ないともいえません。ですが、このままそつと入ればおきるの場合白眉鷺羽殿の認識には引っかかることは無いと思えますからだいじょうぶですよ」

「認識に引っかからないってどういうこと？なにか僕にはあるのかな？」

「ええ、おきるをこちらに送った猫さんによるとそういうステルス機能的なものを後付でつけたみたいです。」

「え、あのアイルーが？」

「アイルーというのですか？」

「うんまあ、名前聞いてないけどその姿だったからその名前で僕は認識しているんだけど、あのアイルーそんなにこの世界の三人の女神と呼ばれる存在に自分を隠しておきたいんだな。」

「ええ、そのようですね。そうでなければ何かしらの異変、たとえば次元がゆがむといった、おきるがこの世界に来たときの現象を認識することぐらいあの方たちにはできますから。」

「ということは、それを阻害する技能が確かに機能しているということか。であれば、ステータス欄の技能に何かしらの技能がのって

いるはず」

僕はそう思ってステータス欄を思い認識した。

これはすごい、認識障害マックスでレベルが振られている。

ちなみに僕はこっちの隠密という才能は無かったみたいだマックスが240となっている。

このポイントは何処から割り振られたんだ？まさか僕があまったポイントIQに全振りしていたところから出したのだろうか？僕は一瞬焦りを覚えたが、それは杞憂であった。

何故なら何の数値も動いていなかったからだ。

と、いうことはだ、これはサービスだな。あーよかった。

それにしてもこの認識障害はどれほどの機能があるんだ？僕はステータス欄の技能の詳細を調べるために再び意識してその項目をえらんだ。

ふむ、これはなかなか使い勝手がいいようだ、自分自身が認識したら気配を消せるというよりも、存在というものを希薄にするらしい。しかもそれはどんな優れた機械をも誤魔化すほどらしい。それは人も同じ。追記としてあのアイルーの手紙がこの項目にデンプされていた。

読むと次の通りである。

この世界にいる高位次元生命体であるものたちに見つからないため、一時的に意識障害を発動させてもらったにや。

それはこの世界に入るときのみ発動させてもらったからそれはもう解けているから安心するにや。じゃなかったらそっちの船穂に認識されにやくなるからそれが切れている証拠になると思うにや。

じゃ、月並みだけがんばるにや。

ではなにや。

ということらしい。

じゃ能力をここは船穂の言うとおりに遙照さんがくるまで力を使っておこうかな。

僕は気配をけす力を認識し発動させ榎木家に足をふみ入れた。

「おじゃましますっ」と

「おきる。おきるのこの力すごいですね。きつと目の前に誰かいても気にされずに通り過ぎるそんなレベルですよ。」

なぜか、船穂さんはこの力に興奮を覚えているようだ。

自分としての実感としては、何も無いのだが……まあ、気配をけすなんてこんなもんだよね？ 簾座連合の天然ステルスもちの翠蓮さんもきつとそう思っているに違いない。

「ねえ船穂さん。どこか座って待っていたいんだけど、どこでもいかな？」

「大丈夫ですよ。あ、それともう力を切ってもいいですよ鷲羽殿は今研究に熱中しているころみたいですから。それに一番の懸念だったドア前の侵入者探知機にはもう反応しません。あれは逐一何処の誰がこの家に入ったのかりアルタイムで動画として鷲羽殿の部屋に転送されるものでしたから。」

なんだ、遙照さんがくるまでしていなくていいのか……。

それにしても、

「そんなものついてるんだ。よくわかるね。それと、いまの鷲羽さんの様子までわかるなんて」

「ここは、私のテリトリーですよ。それに鷲羽殿も秘密度の高いものを研究しているとき意外はあまり警戒していませんし。のぞくの

は可能です。それに、私とこんなに会話できるのは主だけ、今はおきるもはいますがそれだけなので、機密の保護はばっちり、よってそれほどセキュリティは強固ではないですよ。何よりわたしのことを信頼してもらっていますしね。なので、鷲羽殿と、メカはただいまをもって誤魔化し成功ということなんですよ。」

「そういうこと、まあそれじゃあそれを信頼して能力を切ろうかな。そうじゃないと遙照さんが僕を見つけれなくて困ると思うしね。で、何処に座ったらいいんだろう?」

ここは広すぎる。部屋もたくさんあるようで、何処に言ったらいいのかなり不安である。ドアを開けた瞬間いろんな罠が発生するんじゃないだろうか? さっきの玄関みたいに。そんな僕に船穂はあっけからんと、促した。

「何処でもいいですよ。ここの居間とか、台所を抜けたリビングの外の池に隣接するテラスに出て待っていてもいいですしね。」

「そうですね、何処にでもですか。あーもう。ケセラセラがもつとうになりそうです。まあいいやじゃ、テラスに出させてもらおうよ。船穂さん。外の眺めがよさそうだ」

そうして僕はテラスに出た。とりあえず、部屋にいるよりは安全だろう。

あーいい天気だ。それにしても大きい池だな。深さもかなりあるんだったよなこの池。もはや湖だろこれは、まあ些細な違いだと思ひ込むことにして、僕はテラスに腰掛けた。水面が太陽の暖かな光に照らされ、きらきらときらと水が乱反射する。なんか眠たくなってきた。気持ちよすぎる日差しのせいだな。そういえばいま何時なんだ。眠くもなってきたけれどお腹もすいてきたな。皇家の実を食べ

るわけにはいかないし。これはもう遙照さんに甘えるしかないかなとかおもいながら、十分二十分とまった。

「ねえ、船穂さんいま何時？」

いつくるんだろ？

「日本時間でもうすぐ十三時半ですね。」

「そんな時間なのか……。ふぁ眠くて、お腹すいた。」

僕は大きなあくびをした。

「もうすぐ来ますから我慢してくださいね。っておきるさん今すぐ目の前の少年に呼びかけてここから退避するように呼びかけてください。」

「え？少年って」

「あの水をくんでいる子です。山田西南君というんですが早く」

「あ、あーあの子ですかそういえば船穂は彼にあっているんですね。ここはどうやらGX Pの時系列に当たる世界のようにですね。はい」

「何、わけのわからないこといつてるんですか、何で知っているのとか聞きたいことはいろいろありますが、とにかく早く、早く。猛スピードで接近してくる宇宙船があります。現在の距離ならば急セーブをかければどうにかなる距離ですが、いざというときのためにあの西南君と一緒に家の中に逃げたほうがいいです。」

「わかってますよ」

「おーい、その君ー。ここは危ないから非難」

「おきる、すません。無理みたいです。あのパイロットこちらにビーンコンがあると勘違いしています。このまま突っ込んでいきます。まあいいません。」

「へ？」

この展開はいろいろ読めたけどまさか自分がこうなるとは思わなかった。

こうして二人は池にしては大きすぎる湖とよんでいいものにつつまむ宇宙船の余波でできた大津波に巻き込まれた。

山田西南 「あぶぶぶぶぶ」

藤崎おきる 「あぶぶぶぶぶ」僕は泳げないんだよー。船穂さん助けてー。

きつとステータス欄にはのびたの弱点とでも記されているだろう。というかもう無理です。

そうして僕の意識は水の恐怖から早々に刈り取られた。

そんなおきるにあきれ、ため息をついたのは船穂であった。

「もう、私が力を貸していること忘れてくださいよ。おきる。」

その言葉は、もはやおきるには届いていなかった。

雨音・カウナツク「あちゃー、やちった。二人も巻き込んだじゃうな  
んてはは、まさか死んでないよねー？」

雨音は、顔を真っ青にして宇宙船の落下時の余波に巻き込まれた二  
人の介抱に向かった。

こうして、藤崎おきると、山田西南の両名は宇宙とのきっかけをつ  
かむことになったのである。

雨音・カウナックとの出会い始めのターン(後書き)

最後まで読んでくださり有難うございます。

良かったら感想 評価お願いします。

では、また次回。

## 雨音と逢照と鷺羽とおきる（前書き）

お待たせしました。いまさらですが、この作品はキャラ数が多いのでキャラ描写がたいへんですね。でも何と書いていけたらと思います。

## 雨音と遙照と鷺羽とおきる

「やっとおきたようですねおきる。」  
僕は船穂の第一声を頭の中で聞きながら目を覚ます。

「おはよう船穂………!」

と僕は暖かく以上に居心地の良い枕から名残惜しいながらも、まだ覚醒仕切れていない頭を動かして、船穂に返事をかえしてから起きようとした。

したが、目の前にある顔はいつたいなんなのだろう。

それは女性の顔であり、彼女は僕を見下ろすように僕の顔をのぞいていた。

その瞬間僕は知覚する。

彼女に膝枕してもらっていたのだと。

それと同時にぼくは彼女のほほになぜか手を出し触れていた。

………そう体がそれが当然の行動というように動いて僕は彼女のことをとても大切にしたいそんな存在に移った。

そんな僕に彼女は微笑んでいた。好きな猫のように魅力的なつり目を作ると売るんだ唇を動かした。

「お・は・よ。おませさん。お姉さんにほれちゃったかなー? に、しっし」

その言葉に僕は、すで返してしまった。

そう、ふだんなら口にしなれないことを。

どんな偶然が働いたのか口にしてしまったのである。  
なんて? それは………。

「はい、大好きです。」

まさに赤面するようなことであった。

それをきいた女性はポカーンと思考が停止した状態になった。

それもそうだろう。

自分よりも年下なぼつやにいきなり告白されたのだ、あきれてものをいえ無くなるのは当然だ。

しかも初対面、お互い名前の何も知らない相手なのだから。何打こいつぐらい思った当然なのではないだろうか？

そんなことを思い僕は気落ちして、今のは聞かなかったことにしてもらおうと口を開けかけたときだ。彼女は今だ自分のほほにある僕の手をいやそうなそぶりすら見せず。

いとおしそうなそぶりをみせて、自分の手を重ね自身のほほに強く僕の手を押し付け僕に向かって口を開いた。

「びつくりしたけどさ、んーそうだね。真剣に考えてあげるよ。でも、いい返事を聞くためには君の努力が要るとだけ今入っておこうかな？私の花婿こうほさん？」

「あ、有難うございます」

「君の名前は？私の名前は雨音・カウナック」

「僕の名前は、藤崎おきるです。雨音さんでよろしいですか？」

この人が、あのカウナック家の人か僕の妹と同じ空気を感じる。

性格とかぜんぜん違うだろうけど、なんかすごい守ってあげたい。

「呼び捨てでも言いついてあげたいけど、それは、君の後のがんばりで許してあげる。」

「はい」

「ふふ、宇宙船に慌てて急制動をかけたけど、うまくかからなくてその影響で池に突っ込んでしまったその余波でおぼれさせた少年に、まさか告白されるとはおもわなかったよ。はは、あ、てれちゃうな」。お姉さん顔真つ赤だよ。」

そうほほをかき雨音さんは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

そんな雨音さんを見て美しいと思うほかにかわいく見え、いまさらながらにこの人に告白したんだと認識した瞬間僕の顔は真つ赤なうれたトマトのようになって、僕の心臓は早鐘を打つようになった。ばくん、ばくん、という音がやけに大きく聞こえる。

そんな僕の様子を雨音さんはじっと見つめると、

「いいおとこになりなよ。じゃ、私はそろそろいいこうかな。」

僕はその雨音さんの言葉に反応しいまだ彼女のひざの上に僕の頭が陣取っているのを理解して急いでどいた。

「す、すいません。膝痺れましたよね?」

「だいじょーぶよ。これでもいろいろと鍛えてるから。さてと、じやあ君に私に会うことできて早く認めさせることができるチケットをあげよう。このパンフレットうけとってくれるかな?おきる」

「あ、はい」

受け取ったそれにはGPとロゴうちがしてあった。

そのパンフレットはプラスチックのように、かたく丈夫のような材

質でできており、見た目、透明であり、それが二つ折りにされてた。しかし、その見た目じょう開けたら何か書いているとはとても思えないものであった。

「いや確かに、かいてあるのだが……」。

わかりやすいものをあげるなら、そうだな。

透明で深緑の色した下敷きのようなものが二つ折りにされているようなものと思ってもらえればいいと思う。

その見た目豪華版で、強度がしっかりしているものという考えでいいだろう。

こんなものでも宇宙の最先端の技術が使われていると考えると。無意味に心が高ぶってしまう。

まあ、それははともかくとして、これと同じものを山田西南という少年ももらったはずだ。

宇宙行きの片道きつぷとも知らず。  
でも僕はこれを知っている。

僕はこれから宇宙に旅立たねばならないだろう。

その前にこの地球でのパスを可能な限り探してからだが、最低でもこの星で天地にかかわった人物を調べてから宇宙に出て行きたい。そう思いながらも、僕は雨音さんからGPのパンフをもらった。

「そのパンフの中身をしっかりとよんで私に会いにきなさい。待っているわよ。」

「ええ、雨音さんに僕の姿を刻みにいきます」

「言うわねー、じゃ覚悟しなきゃね。でも、私のほうが君に姿を刻んじやうかもよ。もうすぐ一級刑事になれそうだしね」

もう刻まれてますよ雨音さん。

妹と同じ空気を感ずる女性を忘れられるはずがない。

そう思いながら僕は天音さんに答えた。  
追いついてみせると。

「そっか、じゃあまってるわ。じゃあね、おきる」

「ええ、また」

そうして僕は彼女が池の上空に止めてあるステルス迷彩をかけてあ  
る宇宙船に乗り込む姿を見送った。

つて、ちよつとまってるよ。

雨音さん。

その背中の赤い糸はなんですか？

パスですか？

パスなんですね僕は急いで雨音さんを追った。

こんなにも早く妹のパスを見つけられるとは行幸だと思いながら、  
けれどそれは目の前の雨音さんに追いついてからの話であった。

僕が気づき声をかけ追いつく前にはもう、宇宙に飛び立ってしまった  
たのである。

「はは、情けない。目の前の女性に見とれ、告白するのに夢中で肝  
心のものを妹の命につながるものを見逃すなんて。こりゃ、お兄ち  
ゃん失格だな。ごめん、ごめんよ。眠。」

本当に気が緩みすぎていた。僕は思わずうなだれ、目に涙を浮かべ  
た。

「おきるどうしましたか。悲しいんですか？雨音・カウナックさん  
待っているといってくれたじゃないですか」

「ごめん、違うんだ船穂さん。自分が許せなくてね、目の前に妹の

パスがあつたのにそれに気づくよりもさきに雨音さんに自分のことを忘れないでもらおう。好きになつてもらいたいそんな感情が馬鹿みたいにせんこうしちゃつて、本当に僕は馬鹿だよ」

「おきる。おきる馬鹿ではありません。」

「でも、」

「でももしかかもしれません。おきるは妹をしっかりと心配してるじゃないですか。実際心が乱れて涙してしまつぐらいに。だから、大丈夫です。パスが雨音さんについていたこの事実を知れたと言うのなら、宇宙が上がればいいだけの話です。今だめでも次ぎやればいいんです。幸いいまどうにかしなればならないわけではないでしょう？今ここでふさぎこんでいたら、この先もつと困難なところにパスがあつた利した突起どうするんですか？」

「それもそうだ、前向きに前向きに考えることにするよ。有難う船穂さん。幸い宇宙への切符は手に入れたんだ。またあえる。だからパスもどうにかなる。そう思うことにするよ」

「そうですね。おきる。宇宙は広くてもある場所さえわかるならいけるのだからそう落ち込むべきではありません。落ち込むよりも先に行動し目的の場所へ前進するのがもつとも重要で有益です」

「ああ、そのとおりだ。前に歩んで見せるよ。船穂さんさて、」

僕は体をしなり伸びをしていったん心のスイッチを切り替えることにした。

「君が、藤崎おきるくんかの」

そうこうしているうちに遙照が来たようだ。僕は姿勢をただし頭を軽く下げ挨拶した。

「お初にお目にかかります遙照さん。藤崎おきるです。いろいろと相談に乗っていただきたいと思い、船穂さんに呼び出してもらいました。」

「ふむ礼儀正しい若者だのー。天地のやつに見習ってほしいもんじやわい。それにしても船穂とわし同様、限定つきではあるがリンク出来るとはものすごい才能じゃな。一応船穂にある少年の手助けをしてほしいということは聞いておったが、細かい事情は君自身に聞くように言われておる。教えてくれるかの？」

「ええ、船穂さんのマスターである遙照さんであれば信用に値します。」

僕はそういって、高位次元生命体のアイルーのことは抜きにしてすべてを語り助けを乞い求めた。

そのときの僕の態度は目に見えて必死でどこかこっけいであつたかもしれない、だけれどこのときの僕は妹を助ける唯一の手立てを失うものかとそればかりが頭にあつたと思う。

そんな僕の話を最後まで聞いた遙照さんは少し困った顔をすると僕の頭に手おいた。

僕は内心助けを子と張られるのでは以下と誤ってしまい。「僕のできることならなんでも」といいかけ遙照さんの眼力に口を強制的に閉じさせられた。

その目は何処までも真剣でとても、僕の助けを無碍に断るとはとても思えなかった。

それを感じ僕はいまさらながら船穂が信頼できるよい人といってい

たのを思い出した。

「おきる君、大変じゃったのー。でもあせりは禁物じゃ、それは目の前に見えているものを曇らせ見えなくしてしまうものじゃらだ。まずは、雨音・カウナツク嬢にきみの妹さんのパスがついていたのなら、話は簡単じゃ、何故なら、君はそこまで行くためのチケットをもらったじゃろう?」

そうだった。

僕は彼女に一瞬にして一目ぼれし、告白までしてしまったのである。それを思い出して僕の顔は真っ赤になった。

「ほーなるほどのーあの、カウナツクのご令嬢にプロポーズとは」

「え、え、どうして、僕はそれを遙照さんに言ってないですよね」

「船穂じゃよ。いま教えてくれたんじゃ」

「ふ、船穂。いくらなんでも恥ずかしいよ。」

「クスクス、すいません。おきる、ですが、年長者にアドバイスをもらうならばなるべく打ち明けておいたほうが何かと後々楽ですよ。それが信頼のおけるものでしたらなおさら」

それはそうだと思いますが、クスクスって笑いながらとか少しひどいですよ船穂さん

「ふおふお、船穂、そうおきる君をからかってはかわいそうじゃ。

さて、GPアカデミーに入学の件はそれでよいとして、あとは、後継人としてわしが、一筆すればことは足りるじゃろう。」

金銭のことについてじゃが、G P アカデミーに入学が決まれば学費を払うどころか、給料が出るので、それで問題ないはずじゃ。わしが支援してもよいが、おきる君は船穂に皇家の実をもらったそうじゃな。きつとそれによってお金で困ることはまずないはずじゃ。まあ、今はただの果実、お金にするなら、樹雷の金庫をそれなりに使える権力のある瀬戸殿に相談したほうがよいじゃろ。額が額、で、ものがものじゃからの、売り場所を間違えればぼったくられるか、いい金ずるになりそうな樹雷の関係者と思われる誘拐されかねん。よって、瀬戸殿にどうにかしてもらえようこちらも連絡しておこう。さて、では肝心のパスについてじゃが、天地にかかわるものにパスが着いている可能性がたかいのじゃったな。今日は偶然にもみなが天地のなべを食べに集まる日じゃそれまっでは、この家で、ゆっくりしておくといい」

「あ、有難うございます」

「よいて、あとはそうじゃな、皇家の木とリンクできるといっものはそれなりの関係者以外いわぬほうがよいじゃろ。もう契約済みの皇家の木とはいえ第一世代の木とリンクできるんじゃ。ことは王位継承にまでかわってくるので、そのことは他言無用じゃ。」

「わ、わかりました。」

どうやら、この力は、かなりこの世界では重要視されるようだ。気おつけなければと思っていた矢先、目の前の遙照さんの顔が青く染まったあとにやらいろいろあきらめた顔をしてやれやれと眉間に手をやった。

いったいどうしたというのだろう。

ぼくはこてんと首をかしげた。

そんなのんきな僕に船穂から声がかかった。

「おきる。いろいろとあきらめてください。」

「え？」

どういうこと？と言いつ返し返そうとした瞬間。僕の背後にに今まで感じなかった強烈な気配が襲ってきた。っこれはなんだろう。すごい背筋がぞくぞくするのですが、僕は恐る恐る僕の背後に存在するだろうけはいに向かってふりかえった。

すると、ぼくは理解した。そう、船穂さんと遙照さんの態度に同意して首を立てに勢いよく振ってしまいそうになるほどに、何故ってそこにいたのは……。

「鷺羽ちゃんです。」

と、いうその人本人で、いいえさを見つけたと喜ぶ、ある意味動物のようで、まさに哲学史の特徴たる好奇心の塊を体現するお方であった。

「きみきみー、いまの遙照殿との話はほんとうかにヤー？ 樹雷の血族でもないのに皇家の木とリンクできるしかも、船穂となんてむふふ、おいしそうなねたをみつけてしまったわねー。」

「鷺羽殿おてやわらかにたのみますぞ。ことはこの者、藤崎おきるの人生がかかっておりますからな」

「そんなことわかってるわよ。でも、遙照殿もきになるでしょ？ なぜこの子が樹雷の木と限定的とはいえ、本来なら契約した主のみ許されているリンクをつなぐという行為何故行うことができるのか。」

「それはまあ、気にはなりますが。」

「そうでしょ？しかもそれができるといふことは、それなりに船穂に気に入られているといふことだから、遙照殿の懸念どつり、木選びの儀式の際行ふことを許されたのなら、実際はかなり不可能に近い行為かもしれないけど、でもまあ、あの瀬戸殿のやることだし。もしもがないわけじゃないその際このところでてこなかった、第一世代との契約を行ふことも……おきる、なら可能かもしれない。」

「そうですね。鷺羽殿や瀬戸様にこの子のちからに関しては知られると面白がられると思ひまして、今おきるに教え諭そうかと思つておりましたが、考えてみれば、かなり重要な用件で、これほど大きな力であれば、知られないはずがない。隠すのではなく相談すべきことでしたな。いや、はや、すまない鷺羽どの。」

「いいよ。きにしない。それなりに自分のこと理解しているつもりだしね。まあ、瀬戸殿に多少いじられるのはご愁傷様としかいえませんが、度が過ぎればそれなりにまあ、なにかのえんさねたすけてやるわ。」

「鷺羽殿からそんな言葉がもらえるとは、隕石でも振りますかな。」

「ひどいねー遙照殿。本当に隕石降らしちゃうぞ。」

「鷺羽殿が言つと冗談ですまなそうですから勘弁してください。」

「冗談だよ。冗談。」

「冗談ですか。そうですね。そうに決まっていますな。はっはっはっ

はっは」

遙照はかなりの冷や汗をたらたらしから笑いをしばらくつづけた。あのー僕はそろそろ会話に参加してもいいのでしょうか？となかなか話を切り出せずにいると、鷺羽さんが急に真剣な目つきで話しかけてきた。何かと問題がある方のようにアニメで描写されているようだが（おもにマッドなほうで）性格としては社交的で、近づきやすいイメージを感じる。一緒にいたらかなり楽しいのではなからうか？そんなことをふと思う僕に彼女は容赦くこう問いかけた。

「君はこれからその特別すぎる力の前に、さまざまな困難がふりかかってくるとおもう。それを手に宇宙にいくのかい？詳しくは聞けてなかったが、何か目的があるそんな君は、命ををかけられるのかい？」

「命を？」

「そうさ、きみが手にしているそのG P A카데미の入学申込書……。それを出せば、もう引き返せない。それは、命をチップにする覚悟がなけりやできないそんなものさ。相手にするのは犯罪者で、この地球規模でかんがえるのもばからしい犯罪諸集団とどんばちしたりするってことなんだ。事務方の仕事に当たればそう危険もないだろうが、ゼロじゃない。どんな偏狭惑星に送られるかわかったものではないし、活動物資も届かないことだってある。給料でさえもだ。いくら文明レベルがあがり技術は地球とは天と地の差があるといっても限界はあるんだよ。そんなところに行く覚悟はあるのかい？」

その問いはまさに的を得たものであった。

命を懸ける、それほどまでのものなのだろう。

アニメでは面白おかしく描写されている世界も、生身の人は無重力世界で生きてはいけない。

一歩生身で飛び出した瞬間命がおわるのである。

そんな厳しすぎる世界だ、そこで、犯罪者とやりあえばどんなことが起こるか、きつとこの地上よりも規模が大きい困難すぎる状況に確かに陥ってしまうのだろう。けれど、僕にとってはそんなものである。

なぜかって？それは……。

「妹と、約束しましたから、どんなことがあっても忍耐し、前へと進むと。だから、覚悟はとうに決まっています。鷺羽さん。今の僕は、あきらめてはなんのですよ。」

「はは、まいったねー。十代の少年がもう立派に男だよ。いやー悪かったよ試すまねまでして、でもあそこは力もちろんだけど、なにより心が強くないといういろと立ち行かないそんな場所だからね。」

「大丈夫ですよ。鷺羽さんにはっぱをかけてもらったわけですから、より覚悟は強められましたし、感謝してますよ鷺羽さん」

「そうかい、それはよかった。」

そういうと鷺羽さんは非常にご機嫌な顔をつくり僕に笑いかけるところからかうように笑った。まあ、お約束というやつである。

「にしっしー。私のことは、鷺羽ちゃんってよんで」

「鷺羽ちゃんですか？」

「そうです。私が鷺羽ちゃんです」

アニメでさんざんこの人のこのセリフを聞いたが、実際きくと、なんかかわいく見えてしまうのは、病気なんでしょうか？少し頬が熱くなった気がします。妹よ。お兄ちゃんは病気でしょうか？

「なによー。おきる殿は、私にほのじなのかにゃー」

「いえきつと気のせいです。そうに決まっています。とりあえずこれからよろしくお願いします」

僕は、恥ずかしくなって、これ以上いじられないようにとの抵抗をこめて一気に話した。

そう、きつと気のせいなはずなのである。

雨音さんに告白してしまった以上あっちこっち寄り道はできないと思うのです。

そんな僕の戸惑いまごまごしている様子を見てか、逢照さんと鷺羽さんは二人そろって大顔を見合わせ声で笑い出した。

「鷺羽殿も、きらわれたもんですの」

「なーにきつと照れているんですよ。」

わはは、という感じである。いやー照れているのは本当なので何もいえません。

「そつだ、おきる殿、私にできることだったら助けてやるよ。無料でね。で？何か私に話さなくちゃいけないこといろいろあるんじゃないかい？皇家の木とのリンクできる力のこととかそのほかの、あるんだろ？そつだんにのってやるよ」

そんなふうについてくる鷺羽さんに僕と遙照さんは驚いて目を丸くした。

まるで珍しい珍動物とでもであったかのように。

そんな僕ら二人の姿を見て鷺羽さん、もといちちゃんは、少しふてくされて腕を組みほほを膨らまして「私だって気を使うし、助けたいなーって思うことくらいあるさ」とかいした。

「す、すいません」

「すまんの鷺羽殿。あまりに早く助けを申し出られるので驚いてましたわい。いつものので、実験させろーそれが対価だーとかいいだすかと思ひまして」

「まあ、私の本分は研究開発だし、まあいいさ。あ、でも研究というか君のパーソナルデータはほしいね。どうしても」

「ばーそなる？」

僕は、それなりに天地世界の専門用語だったり、秘密にするべき情報なんかも持つてはいるが、ここで、それをおおっぴらにするべきではないだろうと考え僕はわからない振りをして、というかさわりは知っていても詳しく構造とか理論とかをいえといわれてもわからないので、本当の意味で理解してはいないから、知らないといっても嘘ではないのでとりあえず聞いてみることにした。すると鷺羽さんは、それなりに噛み砕いてわかりやすく。教えてくれた。

「つまりは、パーソナルデータというものはだ、そのもの自身が持つ生体データのことさ。DNAからというか、アストラルデータ。そのものの存在データから才能やさまざまな経歴身体情報などさま

さまざまな情報をぞくにそういうんだよ。それで、いいだろ？ いたくもないしさ」

鷺羽さんは、それなりに自分にストップパーをかけているようだが、手がわきわき動いていて落ち着きがない。

ご馳走が目の前にあるのを必死に我慢しているそんな風景を創造してもらえればわかりやすいだろう。

そんな鷺羽さんの態度にあきれながらも、僕は自分の好奇心にかられ鷺羽さんに調べ手もらうことにした。

パーソナルデータというものをだ。

そして始まる。

毎度おなじみの黄色いやつを頭の上に乗っけてただいま僕と鷺羽さんはリビングにあるソファーに腰を欠けデータ取りにつき合わされている。

まあ僕が頼んだてんもあり、されているというのは、語弊があるだろうが、ちなみに今遙照さんは台所へ、お茶の用意をしにいった。れた。

おいしいお菓子があるそうで、ついでに出してくれるんだそうだ。

しかもそれが、和菓子というのであれば、期待しなければなるまい。言い忘れたが、僕の大好きなお菓子は和菓子である。

洋菓子もおいしいとは思うのだが、僕は和菓子でなければやなタイプである。

そうこうしているうちに遙照さんがお盆の上にお茶セット一式と、和菓子を持って現れた。

「鷺羽殿、おきる。またせたの。鷺羽殿どんな感じじゃな？」

「むー遙照。有難う。とりあえずテーブルの上においといて、今いいところだから」

「ふむ。では、おきる先にいただいていようか」

「まっつてました。」

「ふおふお。好きかねこういってお菓子が」

「ええ、和菓子と日本茶は無敵であるとおう理解します。」

と、僕等二人が茶請けの話で盛り上がっているところ、鷺羽さんが奇声という笑い声をあげた。

思わずお茶を噴出す。遙照さん。でもさすがである。手ぬぐいで口を押さえている。僕のほうはというと、和菓子をほっばっていたので戻しそつにいえ、……戻しました。お食事の方すいません。せきが止まりません。というか、僕のドラ焼きを返せーって感じです。鷺羽さん。いったいどうしたんですか？僕が涙目で訴えた。

「ごめんごめん。これは、銅鑼亭のどらやきじゃないかもつたいないことを」

「鷺羽さんがびっくりさせたんじゃよ！」

「は、は、は。わざとではなかったんだよ。おきる殿だから許して？」

鷺羽さんはかわいらしく首をかしげ、両手を合わせて許しをこいてきた。すいません。かわいいのですがどうしたらいいですか？

「ほらーわたしのどらやきあげるから、ね？」

「わかりました」

決して銅鑪焼きに負けたわけではありません。言い訳させてください。そんなこんなで汚くしてしまっただ。リビングを三人で固づけばくは鷺羽さんからもらった銅鑪焼きにかぶりつきながら、あの奇声の理由をきいた。

「いやーあまりにもおきる殿が、才能豊かだったもので、しかも人外指定の家系をそれなりにもうらしているからおどろいてしまっただははは、まあ、どのだれが、かけたかわからないブラックボックスみたい領域があつたつてのが一番おどろいたことだけだね？で、その件ははなしてくれるのかい？」

もう、話さないと改造するぞつていつている顔は、しないでほしいです。でも、ブラックボックスつて、あのアイルーが気を利かせて見られてはやばい才能を隠してくれたのだろうか？といますか？アストラルで、才能までわかるの？べんりすぎないか？つて、ネージユのスキル欄はみられてないよね？監禁なんて僕いやですよ。それこそブラックボックスですよーアイルーさん？

そんないろいろと絶望しかけている僕に鷺羽さんは、僕のどん底モード状態関係なしに詰め寄ってきた。これ以上入つてはいけない壁を前にした冒険かとか、ハッカーの心境なのだろう。そんなに僕を監禁送りにしたいのですか？ここは、アイルーにも言われたし。秘密でとうそうとうしましよう。

「秘密です。」

「あほかー」

だめです。おこられました。どうしてでしょう？ぜんぜん理由がわ

かりません。鷺羽さんの今の様子は、親父がちゃぶ台をひっくり返すそんなさまを連想させる雰囲気です。そんな僕がびくびくしているのをお構いなしに鷺羽さんはまくし立ててきました。

「この事柄が、どれだけ重要で、どれだけ大切かあんたわかってるの？私にわからない、いえ突破できない城壁をアストラルに構築するなんて芸当が、できるものがあるってことは、それないりの上位存在が、私たち以外にいるってことなのよ。それが、おきるに構築されているということは、そういう存在にかかわったということでしょう？」

「そういう存在ですか？」

「そうよ！」

そう、いきまぐ鷺羽さんの前に熱い緑茶が入った年季の入った高そうな湯の実が静かにおかれた。遙照である。

「鷺羽殿、少し落ちつきなさい。そういう話をこの子に言ってもいいのですか？ご自身の存在は、トップシークレットのはずですぞ」

「は、そうだった。そうだった。けれどこの件はそれどころの話しではないのだけどね。高位次元生命体。しかも私たちより位のかい者が存在する問いことだからね。」

「それは、まことですか！そうになると、このおきるの目的をはたさせるためにきつと動かれたのでしょうか？」

「動かれたのでしょうか？なって、まあそういうことなんでしょうけど！まあいいわ。あーおきる？この話からわかるとおり、私は高位次

元生命体の一人だから」

「ええ」

「しっていた……. . . . . ような口ね」

「教えたもらいました。詳しくどんな存在と語ることは禁止されているのでいうことはできませんがそういうことです。それより僕はこれからどうしたら」

ここまでくればケセラセラ。語れることは語り、アドバイスをもらうことにしよう。

その言葉に鷺羽さんと遙照さんはうなずきあい、鷺羽さんが代表して口を開いた。

「まずは、君の目的とやらを聞こうかおきる。はなしはそれからだ」

そうして僕は、鷺羽さんにアイルーのことはぼかして、もうこの時点でこの世界の高位次元生命体がいることはばれているから、そのような存在というかなりぼかして話した。

といつてもあの高位次元生命体については僕もよくわかっていないのだが、自分の友人であるという以外は、まあそれはいい。

今は妹のことで、その協力を取り付けるのが先である。

そうして僕は語らなければならぬすべてをかたり、おえた。

まあこの人？も、しんらいできるだろうとおもうから。

それにいつの間にか、僕のこと呼び捨てになっているしね？それぐらい心に僕の存在が刻まれたのだろう。

これから先のつてにちょうどいいかもしれないと僕は心の中で思った。

ちなみに僕が語ったのは妹の事情以外に僕の特特殊すぎる能力のなか

から、鷺羽さんが感ずいたものでけ語ることにした。

何故ならあのアイルーがわざわざ、ブラックボックスにまでして僕意外にわからないようにした力なのだから鷺羽さんといえど語るわけにはいかないと思ったからだ。

だから、もうばれていている皇家の木と意思疎通できる能力と、ステルス能力である気配を消せる能力についてだけ話した。話さなかったブラックボックス行き of 技能の中には、ネージユを筆頭に九羅家の人外指定の技能がひしめいている。まあ、ブラックボックスに入っていない人外の方々の力もあるが、これらはレベルが低いのでさほど問われないだろう。でも任意にレベルを上げれるのを知ったらどうなるのだろうか？それこそ秘密にしなければといまさらながら思った。

そうして僕の話聞いててた僕の処遇は、妹のパスを探すために宇宙へでることを意外にも進められるということだった。

僕の体を調べつくすまで離さないとか言われるかと思ったが、ちなみにそう言つと鷺羽さんにでこピンで額をこずかれ、遙照さんに笑われた。

僕の力は大きくて調べがいいがあるが、それよりも今は僕についているこのブラックボックスを突破したくてたまらないとのことらしい。

つまりは自分への挑戦状ととっているようなのである。

アイルーが自分の存在を隠したいのがわかった気がした。

僕が友達だ、なんていつたら今すぐに呼べとかいいそうだ。実際よべるかわからないが、まあそれはともかく、僕の力、おもに皇家の木と主人以外でもリンクできてしまう力については、瀬戸という人に任せるみたいである。

よって僕の最初の目的地は樹雷になりそうだ、妹の話に出てきたベストワンであるから、パスについてはかなり望みが高いだろう。

でも、話は変わるが僕の力は樹雷の裏最高権力者がでてくるほどの力なのだろうか？

鷺羽さんにまた聞いてみたら。

王様になれるよといわれ。

遙照さんにはわしのかわりにやってみるかの？とかいわれた。

正直かんべんしてほしい。

王様とか堅苦しそうでパスである。

パス。

ちなみにしゃれではありません。少し心のなかで一人笑ってしまったのは内緒だ。

そして、残りの力については、とくに権力者の判断を受けねばならないほどでもないとのこと。

まあ、ブラックボックスの力を見たら話が変わってくるんだろうなと思う僕は、他人がわからないようにブラックボックスにしてくれたアイルに感謝した。

いろんなところにつかまるのはごめんである。

それにしても妹を救うために得た力が、いいほうに人との関係を作るうえで機能しているのはいいのだが、機能しすぎてはいないだろうか？まあ、どうにかなるかな？もう、どーにでもなれって感じですよ。

とりあえず今日は、天地たちがいるこの地球にいる関係者をすべて家によんでくれることになった。妹のパスはいつたい誰についているのやらそうして時間が過ぎていった。

今日の夜ご飯はみんなで鍋である。



**雨音と遙照と鷺羽とおきる（後書き）**

よんでくださり有難うございます。

主人公が宇宙に行くのはもう少し後になりそうです。

よければ感想 評価お願いします。

次回は天地たちが大集合します。

きちんとかけるか不安ですががんばります。

鍋料理あーうまかった。(前書き)

大変お待たせしました。

気づかぬうちに評価が1000を超えていたことに驚きを隠せません。  
本当に呼んでくださる皆様有難うございます。

## 鍋料理あーうまかった。

鍋料理を家族みんなで囲みつつつきながら食事をする。

それはとてもよいものだ。

だが鍋料理を食べるさい絶対厳守の法を守るのであればという条件がついているのだが、何故ならば、鍋を仕切る人に必ず従がわなければ、取り合いによる戦争が起こり、団欒のときは崩壊のときになりかねないからである。

なにより、そうなったときの飯はまずいのである。

食事を食べる雰囲気は本当に大事なのである。それにくわえて、味に関しても鍋將軍の言うとおりならば間違いはたいてい起こらないというのも理由のひとつだが、いかに鍋將軍が、重要かわかってもらえただろうか？

そんな役割をこなすこの家での存在は天地であった。

「あーうまい」この一言を僕こと藤崎おきるが発するまでの道のりを今日は語るとしよう。

あの後、鷺羽さんと遙照さんそして船穂さんとの出来事のあと僕こと、藤崎おきるの使命のため遙照さんは天地に関係があるだろう人たちをここ天地家に集めてくれた。

このとき宇宙の技術は通信手段から何からすごいものであると思いき知らされた。

まさか、畑仕事をしている天地に今では骨董品扱いされる黒電話がつながるとは、しかも相手が見え自分の顔を見せることができる相互認識通信で繋がってくれちゃうとは思わなかった。

そして、はじめてみました。宇宙船魍皇鬼、この場所に来るのに時

間がかかるであろう天地の父、柁木信幸、天地から見て義理の母に当たる玲亜を魍皇鬼が迎えに行ってくれたときは開いた口がふさがらなかつた。感想としては、ものすごくでかつたです。の一言だろうか？というかそれしかいえません。

まあ、そんなこんなで全員が集まり僕の自己紹介を皮切りに、みな紹介が始まり、のち僕の使命についての説明が入り、僕はみなの方にいていいるであろう妹のパスの発見のち切断作業を行わせてもらつた。

そう、見つけるため満遍なく見させて……。

あ、もちろん服を着たままというのを追記しておこう。

そうして、あきらかになつた妹のパスを僕は切つていった。

予想通り柁木天地を筆頭に魍呼、柁木阿重霞樹雷、柁木砂沙美樹雷、魍皇鬼、九羅密美星、神木ノイケ樹雷、と切つていった。ちなみに天地の父、義理の母である、玲亜、柁木信幸にはパスはついてなかつた。

あーこれで終わった。後は宇宙だけと思つたときかすかに玲亜さんのお腹にパスらしき赤い線が見えた。

嘘だろさつきまでは見えなかつたのに。そう思つて僕は玲亜さんが驚くのも無視して駆け寄りお腹に手をやった。するとどうだろう。

僕がその線、パスに触れる前に消えたのである。

「どうして？うそだろう？」

僕は思わずつぶやいた。

僕の見間違いだとも言うのだろうか？いやたしかに見えた。はは、嘘だろう。この世界をクリアしたら、まさか、あの世界にいかねばならないとでも言うのだろうか？

制限時間は一ヶ月を30日と計算し、一日24時間。一ヶ月720時間。一年が12ヶ月よつて8640時間。60年がリミットだから、60かける8640時間で518400時間。それまでにこの

世界のパスを網羅してあの異世界にいけるだろうか？僕は不安になり体が震えた。するとどうだろう。玲亜さんが僕の手をやさしく握り、抱き寄せたのだ。

「玲亜さん？」

「だいじょうぶ？私に何か力になれることない？」

本当にこの世界の人にはかなわない、いや、天地の周りに集まった人たちというべきか、本当に勘がよくしかも、頼りになりすぎる。この人たちに頼ることができれば、自分の目的は必ずこなせるそんな確信めいた気持ちが出た。だから僕は今できることをしようと思った。だからこういっただけである。

「とりあえず、元気な赤ちゃんを産んでください」

この一言がここで何をもたらしたのか、場の雰囲気が一気に上がる。悲鳴いや叫びが天地家にとどろいた。

「あ、赤ちゃんてどういこと？おきるお兄ちゃん」

砂沙美ちゃんがほほを赤くして興奮気味に僕に問いかける。僕の服の首もとの襟をぐいぐいとつかんで引つ張らないでほしい顔が近いのである。

「そうですわ！おきるさん。そんな話初耳です。」

「そうだぜー。そんな絶好の酒のつまみ、嘘だったら承知しねーよー」

魍呼さん、阿重霞さんが砂沙美ちゃんに触発されたのか僕に詰め寄る。いやおふた方も顔が近いです。あと魍呼さんお酒臭いです。そんな暴走した三人にどうしようもなくなった僕は、鷺羽さんに助けをもとめ目で訴えたが、助ける気がないのかニヤニヤ僕を見て笑っている。遙照さんは何処吹く風で、早く詳細を聞きたいのか一人榎木信幸にはなしかけ、硬く握手している。親子のいい場面はいいですが、ほんと助けてください。そのとき僕を救う一人の女性が現れた。何を隠そう天然屋の美星さんである。

「三人ともーまずは玲亜さんに詳細を聞きましようよ。おきるさんに詰め寄ってもー解決しないと思うんです。」

「美星さんの言うとおりですわね。ここは」

「そうだねお姉ちゃん」

「美星にしてはいいこと言うじゃないか」

「で、どうなんですかー玲亜さん」

「って、ぬけがけですわよ美星さん」

「わたしもーわたしにもおしえてー」

「にゃーうにゃー」

「私が先に決まっているだろう」

「なんですかこのおサル」

「なんだとーこの阿重霞！」

あーこれがあのゆうめいな魍呼さんと阿重霞さんの漫才かーパワフルすぎて、近寄れません。自分が、解放されたのはいいけどこれじや話がすすまない。

と、やっとけんかの仲裁役ができました。

天地さんのとうじょうです。

「いい加減にしないか二人とも！」

「でもー天地ー」

「天地様ー」

「もう、このことはけんかすることでもないでしょう？おめでたいことなんですから、で、どうなんです？玲亜さん」

「ふふ、天地くんさすがこの家の大黒柱ね。このことは、まだ私の夫にも言っていないかったんだけど、実はね、ここに魍皇鬼ちゃんにのせてもらってくる前にね、検査してみたら」

「おめでただったと」

「そういうこと天地君、お兄ちゃんとしてがんばってね」

「やれることはしますよ。玲亜さん」

「ふふ、ありがと。と、いうことで私玲亜は、妊娠しました。みなさんこれからのことよろしくお願ひします。」

拍手喝采。自然とでた行動なのだろう。皆手をいつせいにたたき祝福した。ちなみに柁木信幸は、うれしすぎて、玲亜さんに抱きつき涙と鼻水で顔がえらいことになっている。そんな父の顔を見て天地は薄く笑い

「じゃあ今日は鍋にしまししょうみんなそれでいいかい？」

と大きく天地は声を上げ音頭をとった。

こうしてみなの満場一致もと、天地の腕を振るった鍋料理が振舞われることになった。

今日という日の鍋將軍はきつと皆にとつての特別なものになっただろう。

見ていて本当にとそう思った。

家族は本当にいいものだ。

僕も帰ったら、久しぶりに鍋でも囲み家族でたべたくなった。

まあ、こうして干渉に浸ったのは予断である。

こうして僕は「あーうまい」と、語るにいたったのである。

そうしておいしいものを食べた後、僕は一人縁側に出た。

僕の後ろでは、まだ皆で宴会しているのだろう喧騒が聞こえてくる。僕は、しばしの休憩として、夜になった空を見上げ星瞬く夜空を見上げた。

「ああ、星がきれいだ」

「それは私のことかい？おきる」

「鷺羽さん」

「ちょっと失礼するよ」

そういうと鷺羽さんはお酒の入った一升瓶片手にガラスのコップをもつてに僕の傍らに座った。僕もつられて傍らに腰を落とした。

「どうしたんですか？」

僕がそう問いかけると鷺羽さんは出会ってから始めてみる真剣な目つきで僕を見た。

「鷺羽さん？」

「おきる。」

「はい」

「あのとき、玲亜のお腹に手を当てていたら？その子にもパスがあったためにいち早く玲亜しかしらない情報を理解できた。そこまではいい。でもそのあとだ、パスは切れたのかい？」

「さすが、鷺羽さんお見通しですか」

「そりゃあれだけ取り乱せばね、玲亜しかり私しかりだよ。で、どうなんだい」

「鷺羽さんの予想どおりだめでした。薄く見えたんですがね、パスが触れる前に消えたんですよ。なんていったらいいのか、パスが不安定で、繋がっているのかそうでないのかわからないそんな状態なんでしょうかね」

「ふむ、だからか、あれだけ取り乱していた理由がわかったよ。で、どうするつもりだい」

「ええ、パスがついてるか、ついてないかは別として、何もかも安定するのを待ちますよ。何事もなければよし、あれば、まあ、鷺羽さんにしてもらいたいことは、しかるべきときに教えてほしいといっておきましょうか？」

「ああ、いいよ。時がきたらね。それにしてもどこまで私らのこと知っているんだい。」

「どこまで、そうですね。断片的なことしか理解していませんが、主要な事柄とイベントはある程度の期間まで理解していますよ。でもそれが、いつ何処で何時何分なんてわかりませんし、実際問題起きるかどうかはわかりません。自分という存在がありますからね」

「そうかい。まあ、深くは追求しないさ」

「どうしたんです。さっきまでの鷺羽さんだったら。詰め寄ってきたのに」

「まあ、そうだろうね。自覚はあるさ。でも、あなたに力を与え、情報を与えたのは高位次元生命体であるものなんだろう？そいつがどういう存在かは知らないけど、おきるから取ったデータで、ある程度は予想できるだろうしまずそこから謎を片付けるさ。いくら私でも、たくさんはできないんでね。この宇宙の謎っているのは本当に飽きない。おきるもそうは思わないかい？」

「ええ、こっちに来てから驚かされっぱなしですよ。」

「だろうね。でも、これからあんたは宇宙に上がるんだ。こんなもんじゃないよ。」

「でしょうね。楽しみにしますよ」

「ああ、楽しみにしな。おきる、あんたの保証人は、私もすることになったからよろしく。瀬戸殿も喜んで保証人になってくれるそうだよ。まあ、何かあったらこれで連絡するといい。」

そういうとカードを僕に渡してきた。銀色で透き通っていてとてもきれいだ。それに穴が開いていて首にかけられるように金色の装飾が施された紐が取り付けてあった。

「使用法はそれを額に当てて問いかけるでもいいし、何かの端末に差し込んでもいい。携帯電話の超高性能バージョンといったほうが理解できるかい？それはデータチップにもなっていて記録媒体にも使える。きつと役に立つだろう。それと補助機能に各種銀行口座利用機能など行政から情報を引き出すのに使える機能をつけておいた。サービスとしてそのカードの中に生活に必要なものをそろえられるお金なんかをまとめてこっちで入れておいたから、当分困らないだろう。皇家の実を売ったら必要ないぐらいの額だが、何かあるかわからないからね。まあ、瀬戸殿にそのカードに登録されている銀行にお金を入れてもらうといいよ」

「有難うございます。鷺羽さん」

僕は深く深くあたまをさげた。

「いいさ。これから本当に長い付き合いになりそうだからね。先行

投資だよ。さて、ノイケ殿が寢床を用意しておくといっていたからね。ついてきな」

「はい」

こうして僕は宇宙に行く前の長い長い一日が終わった。  
明日は宇宙で樹雷でアカデミーである。

「おやすみなさい」

僕はそう布団の中で一人つぶやき目を閉じた。

明日は7時起床。

砂沙美ちゃんのフライパンのたたく音で眼を覚ますことにしよう。

鍋料理あーつまかった。(後書き)

最後まで読んでくださり有難うございます。

やっと、次の話ぐらいで宇宙にいけると思っています。

瀬戸のところまで美星に送ってもらうか魍皇鬼におくってもらうかかなりなやんでいます。どちらにしても無事に樹雷につくわけがないということを楽しみにしてもらえればうれしいです。ではまた。

## タクワン戦争（前書き）

大変お待たせしました。

タイトルから色々と想像してもらえると嬉しいです。

お気に入りも50件になりモチベーションも上がってきました。  
これからもよろしく願います。

## タクワン戦争

朝、フライパンとお玉から奏でられるは騒音。

目覚めの歌とも言つべき音が天地家を支配する。

この家にあるものすべてが音を反響させる反響版のように音を増幅し振るえ、音をさらに高みえと昇華させる。

さながら合唱団のようだ。

そんな目覚ましに僕は心地のよい布団から飛び出す以外の行動以外何もできなかった。

だって、この音はドラえもんで言うならジャイアンの歌声のようであつたから。

いうなればそれには強制力があり従わざるおえないそんな力があるということなんだろう。

さすがはこの天地家を支える小さい大黒柱といったところだろうか？  
そうこうしているうちにだんだんと音が大きくなってきた気がする。  
耳が使い物にならなくなる前に身支度を整えて砂沙美ちゃんのところに行くこう。

こうして僕は着替え、（あ、パジャマは天地さんに貸してもらつたと追記しておこう。）

唯一持つ一張羅に袖を通し、僕は洗面台に移動し顔を洗い、髪の毛を整え、歯を磨き、その他もろもろ整えて砂沙美ちゃんのところ顔を出した。

「おはよう砂沙美ちゃん」

「おはようおきるお兄ちゃん。ご飯できてるよ。」

「それは楽しみだ。」と砂沙美ちゃんに僕は笑顔で答え、何か手伝うことはないかと問いかけると、僕がおきてきたのに感づいたのだ

ろつノイケさんが台所から出てきた。

「あ、おはようございます。おきるさん」

「ノイケさん、おはようございます。砂沙美ちゃんにも言ったのですが何か手伝うことはありませんか？」

「有難うございますおきるさん。ですがもうほとんど準備は終わっていますから食卓に座って待っていて大丈夫ですよ。」

確かに食卓は整えられていた。

きれいに食器類は並べられ、さながら高級旅館の朝御飯の様子を切り取っているかのようなのである。

きつと砂沙美ちゃんはいいお嫁さんになるだろう。

ノイケさんもまたしかりである。

と、そんなこんなで僕は皆が食卓に揃うのを座布団の上で座り緑茶を片手に待つことにした。

そして、全員が揃い朝御飯を皆で取ることにしたのはいいのだが、これは毎度のことなのだろうか？

タクワン一つの取り合いを阿重霞さん、魍呼さんがはじめた。

大人気ないとうか本当にこの二人は見ていて飽きない。そんな呆れるしかない状況にただ目の前の食料を片付けるしかないとりあえず判断した僕に天地さんが話しかけてきた。

「おきる君、今日は瀬戸様のところに行く日だけど準備は出来ているかい？」

「ええ、天地さん。と言つても持つていくものはいま着ている服と、鷺羽さんにもらったこのカードと皇家の実だけですから、両手があればたりるので何も問題ありませんよ」

「そうかいそれはよかった。でも何か袋なりかばんなりあったほうがいいだろう？こっちでなにか用意してもらってからそれに入れていくといいよ」

「ありがとうございます」

「うん。ノイケさんのめめますか？」

「ええ、必要だと思っていたので朝のうちにだしていたものがあります。あとで渡しますね？おきるさん」

「感謝しますノイケさん。」

「いいんですよ。本当は昨日のうちにしてお渡しできればよかったのですが、昨日はいろいろあったから忘れてしまって、ごめんなさいね？おきる君」

「大丈夫ですよ。気遣ってくださってありがとうございます」

「ふおふお、おきる君のような謙虚さがこのお馬鹿二人もあればいいんじゃないが」

と、遥照さんは、魍呼さんと、阿重霞さんを見ていった。

そうこの二人、遥照さんが呆れてみているのも理解せずそんな話をしているのもわからないようで、魍呼さんと阿重霞さんはいまだ夕クワンの取り合いをやっていた。

「ハアー本当になんだかなー。と僕は可笑しくなって大声で笑い出してしまった。

これにはさすがの二人も気づいたのか喧嘩をやめて僕をじっと睨む

と、急に自分たちがやっていることが恥ずかしくなったのか、頬を染めてお互いに顔を見合わすと照れたのか頬をかいてお互いに口を開いて口裏を合わせ始めた。

「まあ、なんだ、いいだろ、阿重霞？」

「魍呼さんまあ、妥当ですわね。」

「あは、すみませんふたりとも。なんか楽しくなっちゃって」

僕はこの二人の反応に寒気を覚えて笑いを必死にこらえようとして口を抑え誤った。

「まあいいさ、ほら口を開けな。」

「え？」

「それで全ては解決するのです。おきるさん早くお口を開けてください」

？よくわからないが二人の必死さに僕は抵抗するとう行動が馬鹿らしくなり、僕は全面降伏して二人の言うとおり口を開いた。

タクワンひとつにこんなにも真剣になれる二人に完敗である。

そうして僕は口を開けた。するとどうだろう。

魍呼さんと阿重霞さんが二人でもつ箸の先にあるひとつのタクワンを、二人の手によって僕の口に入れられたのである。

そう来るとは思いませんでした。

僕はなにやら恥ずかしくなって真っ赤になりながらももぐもぐと口の中に入れられた喧嘩の原因を咀嚼した。

「あのあんまり見ないでもらえますか？ふたりとも」

そう二人は見ていたのである。

うるうるとした半泣きの視線も持って、これを僕にどうしろと？というかそんなにタクワン欲しかったのかこの二人は！

「うーしょうがありませんね。魍呼さんこれは痛み分けということ  
で」

「そうだな。次こそは負けねーぜって負けてないけどな。引き分け  
だけだな」

「ええ、そうですとも誰がなんと言おうとも引き分けです。」

「しいて言うならおきるさんの勝ちですねー？」

「ちょ、美星さん」

さすが天然さんである。その言葉は僕におもいきり矛先が向けられるセリフですよね？と、案の定僕に矛先が向いてきました。

「おきる。あーもう今回はだ、とりあえずタクワン買ってこいそれで許してやるよ」

「そうですわね。タクワンで許してあげますわ」

うー今度は僕が唸るしかありませんどうしたらいいんでしょうか？全く美星さんにはかないません。

この場合はおとなしくタクワン買ってきたほうがいいんでしょうね

？僕はそう思い、砂沙美ちゃんに買ってくる旨を伝えた。

なぜ砂沙美ちゃんにいったかつて？それはここ天池家の懐事情を握っているのが砂沙美ちゃんであるはずだからだ。

確か天地無用のラジオドラマで魍呼さんと阿重霞さんの喧嘩のさい出る被害額で家計が火の車で大変であるとかいう内容だったはず。

まあ、そんなことを思い出しては、買ってくる際のお金をもらうのも気が引けてしまうが、自分はこの星のお金を持っていない以上貧乏ということにかけてはここで一番だろう。

宇宙に行ったらそうではなくなるのではあるが、まあそれは置いてまずタクワンである。

早く買ってこないと魍呼さんと阿重霞さんにタクワンのかわりに食われかねない。

いろんな意味で、さあ、砂沙美ちゃんお金を貸してください。と手を差し出そうとしたところ砂沙美ちゃんにいきなり頭を下げられた。

「ごめんなねおきるお兄ちゃん。砂沙美があとで買ってくるからいいよ。まだおきるお兄ちゃんごはんの途中だし、今日は瀬戸様のところに行くから忙しいでしょう？」

あー砂沙美ちゃん君はなんていい子なんだ。僕は思わず涙を流して砂沙美ちゃんの頭を撫でた。

「ありがとう、ありがとう、砂沙美ちゃん。」

「へへ、大丈夫だよ。おきるお兄ちゃん。魍呼お姉ちゃんと阿重霞お姉ちゃんのご事は砂沙美に任せといて」

「いいこだろー砂沙美ちゃんは」

「はい天地さん」

「はは、阿重霞殿、魎呼ちゃん。おきるに加えて砂沙美ちゃんまで迷惑をかけて恥ずかしくないのかい」

鷺羽さんが、見かねたのかやつと仲裁に入ってくれた。

反省したのか当の二人はシヨボーンとすごい落ち込み方をした。床にの字を書く阿重霞さんと魎呼さんなど初めて見ました。

「うーすみませんですわ」

「ちえ、しょうがねー今回は引いといてやるよ」

「よかったですねーおきるさん」

「そうですねー美星さん」

誰のせいだ！と言えない僕をきつとチキンというのでしょうか。でもあのポワポワした笑顔には突っ込みきれません。

そんなこんなでやつと僕はいや僕たちは朝御飯をたべおわることができた。

さて、ノイケさんがくれたかばんに、これまたノイケさんと砂沙美ちゃんが用意してくれたものを入れていく。

ポケットティッシュ四つ、ハンカチ四枚、砂沙美ちゃん手作りの弁当。（中にキャロットサンドが入っているらしい）そして鷺羽さんがくれた小型冷蔵庫（これで、皇家の実際の鮮度が保たれるらしい）をいれ、もちろん鷺羽さんお手製の銀行カード兼高性能携帯もちろん持ちましたよ。ちなみにこれは首にかけています。さて準備完了だ。

「準備これで完了ですね。おきるさん」

「瀬戸様によりしく伝えておいてねおきるお兄ちゃん」

「ありがとうございますノイケさん。大丈夫だよ砂沙美ちゃん必ず瀬戸様に伝えておくよ」

「うん。じゃあ誰がおきるお兄ちゃんを樹雷に連れていくかという  
とね」

「うんだれだい？」

「まだきまつてないのー」

「へ？」

「いえ、私が送ろうとはじめは思っていたのですが、魍呼さんが壊した屋根の修理をやらねばいけない仕事ができちゃって、それでどうしたものかと思ったのですが、美星がGPによる用があるらしくって、じゃあ美星でと決まったのはいいのですが……」

「魍呼お姉ちゃんが、行きたいと言い出しちゃって。それに感化されたのか魍ちゃんまでいくって言い出しちゃって、それでね？」

「どうなったの？」

「美星と魍呼さんと魍ちゃんみんなで行くことになっちゃって、なんというかなにか問題起きたらごめんね？とか言わなきゃいけないメニューになってしまっただけ？」

「ノイケさん」

「なに？」

「それは百パーセント問題が起きると言うことでもいいんですね？」

「あはは……。ごめんね？」

「ごめんなさいおきるお兄ちゃん」

「砂沙美ちゃん、ノイケさん。……。フーわかりましたよ。こうなることはまあ、許容範囲ですよ。そう思っていないとやっつけられないですからね」

「そう言ってくれると助かるわ、おきる君。さてそれじゃあ魍呼さんと美星を呼んできますから、荷物を持って玄関で待っていてください。あと、魍ちゃんおきる君と一緒に待っていて」

「うみや」

そうノイケさんが言うのと理解したのか砂沙美の肩にいた魍皇鬼は僕の肩に飛び乗った。

ものすごく可愛いです。お腹に顔をうずめてモフモフしたいのです。はい。

「ちょ、おきるお兄ちゃんしてるし、してるよモフモフしてるよ。」

「へ？」

本当でした。僕は思わずやってしまったようです。

「もう、おきるお兄ちゃん思考がダダ漏れだよ。そんなに魍ちゃん  
気に入ったの？」

「いやー小動物には目がなくって、特にネコ科はわれを忘れてしま  
うですよ。砂沙美ちゃん」

「うん、今の見ていてもものすごく納得したよ。動物がおきるお兄ち  
ゃんを狂わせるんだね」

「そう狂わせてしまつてさって砂沙美ちゃん」

「へへ、でも本当でしょ？」

「う、否定出来ない。出来ればこのまま魍皇鬼をお持ち帰りしたい  
感情を否定できません」

「だ、だめだよ魍ちゃん連れて言っちゃだめだからね」

「だ、だいじょうぶだよ……。だぶん」

「たぶんじゃだめー————」

「なーに騒がしいことやってるんだよ砂沙美」

「あ、魍呼お姉ちゃん。だって魍ちゃんおきるお兄ちゃんが連れて  
いちゃうって言うから」

「？つれていくー？当たり前じゃねーか瀬戸のおばはんところへは  
魍皇鬼でいくからな。それと行く船は一つで足りるから美星の船を

魍皇鬼で空間圧縮して樹雷に向かっつて砂沙美もそれを昨日聞いて  
いただけるっ?」

「そうだけど、そうじゃなくってー」

「あらあらどうしたんですか? 砂沙美ちゃん」

「うゝ美星お姉ちゃん」

砂沙美ちゃんは美星さんに泣きついてカクカクシカジカと魍皇鬼に  
ついて語った。

それについての美星さんの結論はこうである

「おきるさん。魍ちゃんへのプロポーズはいくらなんでも早過ぎる  
と思うんです」

「え、おきるお兄ちゃん魍ちゃんにプロポーズしてたの?」

「にゃ?」

心なしか魍皇鬼のほほが赤い気がする。

目元がうるうるしていかかなり可愛い。ってそうじゃなく僕はロリ  
でもペドでもありません。と僕は熱く反論してみます。

「でも、魍ちゃん好きなんでしょ?」

「う、砂沙美ちゃん、いいかせません」

「魍ちゃんおきるお兄ちゃん事どう思っつ?」

「うっ？にゃ、にゃあう。にゃ」

「好きだけど夫にするのももう少し考えたいって、だから連れていけないでねおきるお兄ちゃん」

「もう好きにしてください」

「って脈はあるということでしょうか？少し考えたいとはこれいかにって、僕はロリじゃありません。」

「ほら、みんな、おきる君をいつまでもからからかってないで早く行ってきなさい。美星迷惑かけるんじゃないわよ。」

「わかってますよー雪之丞もいるから大丈夫ですー」

「そうならいいのだけど、魍呼さんも宜しくお願いしますね」

「わかってるよ。おきるを送ってきたらすぐに帰ってくるさ。今日は秘蔵の酒がいい味になっているはずだからね」

「でしたら心配はありませんね。ごめんなさいおきる君本当に私が送れば何も問題がなかったのですぞ」

「大丈夫ですよ。なんだかんだで、短い間でしたがみなさんがとてもいい人であることは理解していますから、何が起きてても恨みません」

「そう良かった」

ノイケは安心して肩を下ろした。

「ほらいくぞおきる。いつまでくっっちゃべってるんだ」

「まあまあ、魍呼さん。おきる君そろそろいきましよう。瀬戸様のところ意外に今日はGPにも顔を出さなきゃいけませんから早く行って時間的余裕を作っていきましょう」

「美星にしてはいいあんじやない」

「私だつてたまには感心されることぐらいありますよーだ」

「本当にたまにだけどね」

「ひどいノイケちゃん」

「ったく、何二人でじゃれているんだよ。全くほら、おきる行くぞ。」

「あゝ待つてください魍呼さん。」

僕はズルズルと魍呼さんに手を引かれて、後ろからは美星さんが走り、追いついて広い池のほとりに三人と一匹が揃った。そこで待っていたのはいつの間にか天池家の皆様全員である。ノイケさんと砂沙美ちゃんもである。さすが宇宙人地球人とはスペックからして違います。

そんな僕が感心しているところ皆が一斉に声をかけてきた。なんか嬉しいですねこういうの。

「おきる君大変だと思っけど頑張って」

「天地さんありがとうございます」

「おきるー私があげたものでビックリすることがまああると思うけど気にしなさんな」

「へ？鷺羽さんがくれたあのカードですか？あれには必要最低限の鷺羽さんがくれたお金が引き落とせる銀行のカードの機能と、超高性能の携帯電話機能の他に何かあったんですか？」

「いや、まあそのとおりなんですけど、まあ宇宙についてからのお楽しみさ。そのほうがきつと楽しいから。主に私が」

「そうですか、いろいろ諦めることにします。」

「なんか、天地殿いじょうにこのメンバーの扱いに色々と慣れてくるのが早いんでないかい？」

「そうでしょうか？鷺羽さん」

「ああ、まあおきるは色々私たちについて知っていることがあるっていうのもあるとおもっただけだね」

「そうですね。まあ、でも実際に体験するのと傍で見るとでは色々と違いますよ。鷺羽さん」

「なんのことだい？」

と、僕と鷺羽さんの密談にひとりの男が失礼。天地さんが不思議に思ったのか声をかけてきた。それに対して鷺羽さんはいやらしい笑みを浮かべ天地さんを諭した。

「天地殿まあしらなくていいことさ」

「鷺羽ちゃんがそう言うならそうなんだろうね」

なんか、天地さんが冷や汗を流していますますがきにしたらまけなんでしょうね。僕はとりあえず黙っておきましょう。鷺羽さんそんなに睨まなくてもわかっていきますよ。

「フフフ、おきる利口な子はすきだよ私は、さて、おきる。もうそろそろ時間だねいってきな。」

おっともうそんな時間ですか僕は皆に頭を下げ魍皇鬼に乗り込んでいった。

「行ってらっしゃーい。おきるお兄ちゃん」

「いってらしゃいませおきるさん」

「いってらしゃいおきる君」

「行ってきます。鷺羽さん。砂沙美ちゃん。阿重霞さん。ノイケさん」

「ふおふお。瀬戸様にはまあ苦勞するじやろうが頑張ったの」

「はい、遙照さんもお元気で。ではみなさん行ってきます。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

みゃ――――

そうして僕は魍皇鬼にのって宇宙へと飛び出した。目指すは樹雷である。

おまけ

「あ――――私の宇宙船がぺったんこです――――」

「空間圧縮しているから当たり前でござる美星殿」

「てへ、そうでした雪之丞」

「でもー痛くない？ねえ雪之丞？痛くない？」

「かー美星なにいつてるんだよ。お前も圧縮してやるつか」

「ブルブル、実は私おせんべいは食べるほうが好きなんです。魍呼さん。」

「全くなんの話だよ、まあ私も食べるほうが好きだけど、はあ、私が言うのもなんだけど美星は美星だよねー。雪之丞だっけ？あんたも大変だねー」

「察してくださいるか廻呼殿そうなんでござる。あのときも、あのときも、あ・の・と・き・も美星殿はー」

「あーんごめんさーい」

ということ僕はただいま宇宙です。  
地上にいても宇宙にいても僕の周りはこれから騒がしくなりそうです。

寂しくないのでもいいっかと考えてこれからを楽しみたいと思います。

（藤崎おきるの日記より抜粋）

「さあ、まってるよ。眠」



## タクワン戦争（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。  
評価のほつももつすぐ二百が超えそうです。これも皆様のおかげです。

この場を借りてお礼申し上げます。

次回は山田 西南が出てくると思います。

**松茸狩りにご注意を！（前書き）**

大変お待たせしました。

更新です。

それとこの話に西南がでると予告していたのですが、長くなりそうだったので、西南偏は持ち越すことにしました。申し訳ありません。

次の話かその次かで西南のもとまで書ければと思います。

## 松茸狩りにご注意を！

僕は初めて星から飛びだして地球というのを見た。

魍皇鬼が映しだしてくれる地球の映像は、どんな高画質の映像機器でも再現できないであろう姿を僕の目に届けてくれた。

景色を見て心から「ハラショー」と叫びたくなるそんな人生に、感謝する。

まあこれが、妹の不幸から来たというのが、悲しい現実だが、今は、素直にこの状況を楽しむことにした。

焦ってもしょうがないと心に言いつけて。

ああ、それにしても本当になんて美しいのか、この澄み切った青の星、地球は。

そんな感想に浸っていると柔らかな手が僕の頭におかれた。

その手はちよつと乱暴な、だけど親しみ深く安心出来る、そんななかたをする手であった。

「どうだい、おきる。初めての宇宙は」

「魍呼さん、感動の一言です！それに、この魍皇鬼の中も素晴らしいですね。大理石のようにつややかで、透き通るほどの透明度をもつ結晶体で周りが構築されていて、全てに生命が宿っているそんな感じがします。しかも、その感じる生命力は優しくて、本当に居心

地がいいです。」

「はは、そうかい。魍皇鬼、聞いてるかい？」

「ニヤオーン。ニニヤアーン」

魍皇鬼の照れたような鳴き声が船内に響く、それをきいた魍呼は嬉しそくに唇をあげた。

「一丁前に女の子してるじゃないか魍皇鬼。何照れてるんだい」

「魍呼さん。魍ちゃんは嬉しいんですよ」

「美星か、だつてよ。おきる。」

魍呼はおきるの目線に合わせるように腰をかがめると、身を乗り出しておきるに迫った。

まるで、猫の前にまたたびが置かれるそんな寸前のいい笑顔の魍呼である。

きつとおきるをおちよくってやろうということなのだろう。

そんな挑発におきるは乗るところか、嬉しそくに魍呼をスルーして、魍皇鬼のメインコンピュータがあるだろう中心角の結晶体のところまで行くと、それに触れた。

「魍皇鬼、また僕がきたとき遊ぼう」

「にゃん」（絶対だよ）

「ああ、楽しみにしてるよ」

「ちえなんだよー。するーかー」

「魍呼さんすねないください。いい大人なんですから。」

「クー美星のくせにー」

魍呼は悔しそうにムキーとしてみせた。

まるで猿である。

その魍呼の様子に美星は微笑ましそうに微笑んだ。

「ふふ、魍呼さんかわいーってあれ？魍呼さん、おきるさん魍ちゃん  
の言葉理解できるようになったんですか？」

美星は魍皇鬼のメインコア近くで談笑しているおきるを指さした。

それを見て魍呼は面白そうに表情を作った。その微笑みはある意味  
鷺羽の娘と理解させるには十分であった。

「ん、いや、ほんと面白いよ。あの様子をみると、理解出来てるだ  
ろ？いつたいこいつの才能ってやつはどうなってるんだらうね。お  
い、おきる魍皇鬼の言葉、わかるのか？」

「えーっとわかりますよ？一体どうしたんですか？」

おきるは突然の問いかけと、その内容に何を行っているんです？と

小首をかしげた。

魍皇鬼の言葉がわかるのはそんなに変なことなのだろうか？という具合である。

おきるにとつて今の魍皇鬼の言葉は、おきる本人が気づかないだけで、普通の人が喋る言語を聞くのと何ら変わらないものに昇華されているのであった。

そのことに気づいていない青年おきるは、一人こてこてと首をさらにかしげた。

それになんとなく気づいた偶然の天才はおきるに答えを提供するように問いかけた。

「エットですねー魍ちゃんの言葉は超高速の言語みたいな感じで、ある程度魍ちゃんのそばで一緒に暮らしたりだとか、生体強化しないと理解出来ない、そんな言葉なんですけどーしてました？」

「え、あ、そういうば（そんな設定あったな）」

おきるは先にもあげたが、案の定そんなことすっかり忘れていたのであった。

猫が好きというそれだけの理由でスキルが目覚めたのだろう。

きつと今スキル欄を見たら、超高速言語理解度100%とでも乗っているだろう。

そんなおきるに、呆れたような、でもなんとなく嬉しいような、妹

に友達ができたのを傍で見る姉のようにして魍呼は満足そうに微笑んだ。

「すごいじゃねーかおきる。天地でさえ、魍皇鬼の言葉を理解するのに時間がかかったってーのに」

「そうなんですか？有難うございます魍呼さん。それにしても、これでもた魍皇鬼と仲良くなれそうですよ。」

「ににゃ」「(そうだねー)」

「ふふ、おきるさんずいぶん魍ちゃんにご執心ですね？」

「いやー猫には目がないんですよ。色々とお持ちかえりにしたいぐらいに。まあ、砂沙美ちゃんに止められるからしませんが、だぶん」

キラーン

「うわ、おきるさん。今の顔おもいつきりハンターの目をしてましたよ。ねこですか？」

「猫？」

「いや狼だな。しかも女子を襲う凶暴なやつ」

「ふふ、そうかもですねー」

「にゃうにゃう」「(こわいよーぶるぶる)」

「あー魍皇鬼、怖がらないで、変なことしないし、好きだから」

「じゃああつ」（うっしんじる〜）

「はっはっは」

「もう、魍呼さん勘弁して下さいよ」

「いやーすまん。ちょっとイチャイチャするお前たちをからかってやるっかと」

「魍呼さん趣味が悪いですよ」

「なーにいつてるんだよ美星も楽しんでたたる？」

「少し」

「みほじさんー」

「いめんなぞ〜」

ぎゅるぎゅるぎゅる〜。その時誰かのお腹が、激しくなった。

「誰のお腹の音ですかー」

「あたしだよ美星、いやーいろいろとぶざけたら腹空いちまった。」

ぐびぐび

「お酒飲みながら言わないでください〜。でも魍呼さん、この船に

はなにか積んであるんじゃないんですか？」

「いや。非常食というか緊急パックがあるだけでほかわないわよ」

「えー」

「じゃ、砂沙美ちゃんからもらったお弁当食べますか？」

おきるはおもむろに背に担いでいるリュックから砂沙美ちゃんお手製のお弁当をだそうとした。

それを見て嬉しそうに手をこすりあわせる魍呼

「なに、おきるもらったの？いいねー」

「だめですよー、それは砂沙美ちゃんがおきる君に作ったんですか」

つと、此処で待ったが入った。

それに対して、魍呼は舌打ちするにとどめた。

「つちえ」

びっくりである。あの魍呼が美星の言葉でササミの弁当を諦めたのである。

おきるはその様子に、目を丸くして少し拗ねてる魍呼を見つめ、美星を見た。

「あの、美星さん？ぼくはいいですよ？お弁当は食べるものですし」

その言葉に美星はダメな弟をしかる。姉のようにしておきるを叱り始めた。

「ダメだったら、ダメなんです！いいですかおきるさん。女の子が男の子に作ったお弁当には、ある一つの呪いがかかっているって聞いていますか？」

「へ？そんな邪なもの、あの砂沙美ちゃんがかけるわけがないですよ」

「まったく、おきる。なにいつてるんだよ。これぐらいのなぞかけ私でもわかるてーの。」

何、見当はずれなこと言っているんだと言わんばかりに魍呼までもおきるに叱責し始めた。

事件である。

あの食いしん坊の魍呼さんが真人間になっているのだ。

おきるは少しすねそうになりながらも問いかけた。

「うー魍呼さん、じゃあなんだって言うんですか？」

「愛情だよ。」

魍呼は自信満々に答えた。それはもう自前の大きな胸を大きくさらして、そんな魍呼におきるは先を促した。

「愛？」

「そうさ、恋とまでは行かないまでも、砂沙美なりにおきるに食べて欲しくて作ったんだろう？じゃあ、それを食べなけりゃ、その気持を捨てる行為になっちまう。つまりわだ、弁当という食料的概念だけで考えるなということだよ、少年。それは弁当という名の砂沙美の心だよ」

「は、魍呼さんへんなものでもたべたんですね」

そんないいこと言ったぞーと、胸をはっていた魍呼に天然さんはいらんことを口にした。

だけど、美星に少し同意したくなるおきるであった。

でもまあ、魍呼さんの言っていることは正しいし、ここは言つことを聞いておこうと思うおきるであった。

そんな、思いを改めるおきるをよそに、怒り心頭している魍呼は、美星のこめかみに自身の両手を拳に変えると、グリグリとやり出した。

「くーなんだよ美星！言うに事欠いて、食べたんですか？ならまだしも、食べたとかいって決定事項かい！」

「このこのこの」

ぐりぐりぐり

「うーごめーんなんさーい」

「ったく。ふーそれにしてもハラ減ったー」

「ん？なんかいい匂いしないか？」

「へ？何もしませんよ」

「いやする、魍皇鬼このへんー帯をスキャンしてくれー」

「にゃああう」（了解）

びびびびび

「にゃー……」

「宇宙船がヒットしましたねー」

浮かび上がるホログラム、そこには中型貨物船のようなごっこごっこ船が映し出されていた。

しかも色々と改造しているのか、武装のようなものがごっこごっことせつつちしてある。

「んーこいつから松茸の匂いがする」

魍呼はスンスンと鼻を犬のようにひくひくさせて答えた。

「まつたけですか？」

おきるは魍呼に問いかける。

そのおきるの問いかけに何か思い当たったのか、美星が興味深いことがあると言って口を開いた。

「そういえば、アカデミーにごく僅かですが、地球産の食べ物船穂様のところ以外のところから流通している噂が流れていましたねー」

「そんなのがあるんですか？」

「ええ、しかも面白いんですよーその流通している食べ物があると……なんだと思います？」

「つまりは、それが松茸だということですか？」

「正解です。」

「ふふ、ふはは、はーははは」

魍呼は、おきると美星の会話を聞いて突然笑い出した。

「どうしたんですか魍呼さん？」

「いざゆかん！松茸狩りならぬ宇宙船刈りを」

「ってだめですよ。相手が海賊とかならまだしも」

おきるはさすがにと思い魍呼を止めに入ったが、それを意味をなくす一言をいう者一人。

天然さんのパートナーご存知雪之丞である。

「海賊ですぞおきる殿」

「へ？雪之丞？それはほんとうに……」

「しゃーあ！いぎ、松茸を食べ、いや、海賊を捕まえようではないか」

「もう、魍呼さんいろいろとキャラが壊れてますよ」

「GSからでる一般向け賞金額は5000万ぐらいですぞ、魍呼殿」

「もう決定、なーおきる」

肩を組んでくる魍呼さん、色々あたって気持ちいいです。胸とか胸とかおっぱいとかってそんなにいっぱい言わなくてもわかりますよね。おっぱいって。

「はは、じゃあ行きましょうか？」

僕は観念して、海賊をかることを承諾した。

「「おー。」」

なんだかんだで僕の根負けからの一言に美星も賛成し海賊を負うことに決定した。

「やあああああああ。」

「なんだなんだなんだ」

「艦長、超高速の高周波が、うちの船に叩きつけられています。」

「艦長、周波数の影響で機器が、バグってますー（泣き）」

「えーいい、せっかく地球の乙女ばあさんから買い付けた一年分の松茸にほくほくしていたところだったのに、一体なんなんだ!」

「きつと、その松茸を狙ってるんですよーかんちゃー」

「かんちゃー言うな。バカ娘!お母さんが仕事中の時は艦長と」

「かんちゃー、はやくにげないとかもー」

「うー、一体どこの船がよりによって襲いかかってくるんだい。」

「まま、データ照合終わったよ」

「お父さんまで、艦長って呼んでください。部下に示しが、というか家族に示しが」

「そんなことより、かんちゃー父たんでーたみると魍皇鬼って乗ってるよー」

「は、魍皇鬼って?あの伝説の?なんでそんな数千年前の樹雷を襲

った海賊艦がデータに引つかかるのよー」

「それよりかーちゃ」

「わかってるわ、ジャンプよジャンプ。デコイを多数投下後、照明弾をあるだけ射出して逃げるわよ。」

「おーけ、かあたん。このばぐめー、いう事聞きなさいー!」

ドコーン、この娘はとなりの父の頭をおもむろに掴むと、計器類にものすごい力で押し付けた。

「手が痛いです。とーたん」

「とうさんは頭がいたいです。」

血がだらだら。

「よくやったわ、さすが我が娘、バグが一時てきに回復したわね」

「あい、では、はっしやーーーーー」

「ああ、父さん泣いてもいいよね?」

ああ、無情、この恵まれない父の涙と共に、この家族らが保有している船は宇宙空間を長距離ジャンプした。

「っち。ジャンプしやがった。」

「追いかけれないんですか？ 魍呼さん」

「大丈夫さ、大体の予測はつくはずだよおきる。 魍皇鬼！」

魍呼は急いで消えた宇宙船を索敵するように声を張り上げて促した。

それに魍皇鬼は悲しそうに答えた。

「にゃあ」（眩しくてよく見てなかったにゃー）

「ダメみたいだすねー」

美星はどこから出したのかその場に正座して、緑茶を飲んでいる。

見るからに諦めムード全開である。

「うー私の松茸」

魍呼は若干涙目で拗ねた。

あーやばい可愛いとか思ってしまった僕はダメな子ですか？

おきるは、魍呼の珍しい表情に思わず萌えた。

そんな思考をもんもんさせているおきるをよそに美星のツッコミが魍呼に入った。

「魍呼さんの松茸ではないですけどね〜」

「しるせ」

魍呼はいじけモード突入である。

そんなにも松茸が食べたかったのだろうか？

そんな様子におきるは苦笑して、慰めようか？そう思って魍呼に近づこうとしたとき、おきるの脳内に語りかけるものが現れた。

言わずもがな、皇家の樹、第一世代、船穂である。

「おきるさん、おきるさんどうしたんですか？私の索敵範囲で爆発音がありましたか」

「あ？船穂さん、なんか海賊を追っておたら見逃しちゃったみたいで今魍呼さんが拗ねてるんです。」

「ふふ、すねてるんですか？でもいつのこのことですので、あまり気になさらずに」

「うわ、冷たいんだ」

「うー冷たくありませんよ。いつものことといったままでですよ。おきるさんの意地悪」

「ごめんごめん、ちょっと行って見たかったただだから気にしないで。船穂さんが僕のこと気遣ってくれているのにはホント感謝してるからさ」

「そうですか？それなら勘弁してあげます。それはそうと、さっき

海賊とか言っていましたね？」

「うん」

「海賊はしりませんが、先ほどジャンプした宇宙船ならこちらで感知していますよ」

「え、それはどこ行ったのかわかる？」

「それならH・3056に飛びましたよ。この太陽系を抜けた先です」

「おーさすが船穂さん。有難うございます。廻呼さん、場所分かりましたよ」

「なんだって！一体どうやって。」

「船穂さんが教えてくれたんです」

「そつえばそんな能力があつたんだつたね。あーもう。おきる、そついう事はもっと早く言ってくれよな！あー落ち込んでそんした」

「え！おきるさん、あの船穂さんとお話できるんですか？いいですねー。どんな感じなんですか？どんなかんじ〜」

「ちよ、美星！興奮するなっつーの」

美星は、突然猫のように俊敏になると、おきるの方に詰め寄った。

あ、この人もおっぱいが大きい、なんて胸に話しかけてしまいそうなほど近い。

そんなおきるにじゃれつく美星に嫌気が刺したのか、魎呼は猫をつかむようにして美星の襟首を掴むと

「雪之丞、美星の話し相手になってやんな」

という言葉と共に、放り投げた。

「え〜んゆきのじょー」

美星はそのシヨックでおでこを盛大に床とゴチンとやってしまったらしく泣いて雪之丞に擦り寄った。

この光景は少しカオスである。

だって雪之丞は魎皇鬼に圧縮されて床にへばりくっつくようにいるものだから、美星は床に擦り寄るナメクジのごとく、自身の頬を床に密着させて泣いているのである。

おきるはさすがに慰めたほうがいいとおもい近づいて頭を撫でた。

するとどうだろう。

美星は親を見つけて擦り寄る猫のようにしておきるにしたられかかってしくしくと泣きはじめた。

色々当たって気持ちいいですとはとても言えないので、おきるは頬をいろいろ染めながらも美星の頭や背を落ち着かせるように撫でた。

そうこうしていると、魍呼が、自分の頬を気合を入れるように打ち叩く音が船内に響き渡った。

「さて、おきる。美星はほっときな、そんな事やってたら大捕物を逃してしまふよ。」

魍呼はおきるに向かって獲物をかる目付きでそのようにのたまった。

おきるは背筋が寒くなるのを感じながらも、苦笑して、「もう少し美星さんを慰めてます。」といった。

それに対し、魍呼はなんとも微妙そうな顔をして、でも最後にはしよつがないと頷いて、一人座標を魍皇鬼に指図した。

「魍皇鬼ジャンプだ！」

「じゃおーん」（了解）

そしつて僕はジャンプした。

船穂

ふー慌ただしい人たちでしたなー。それにしても、なんであの宇宙船の事を海賊なんて言ったのかしら？

いつも来る人達なのに。

でもまあ、おきるさん。

良い旅を、心から応援しております。

**松茸狩りにご注意を！（後書き）**

最後まで読んでくださり有難うございます。

DVDとか見直したりして書いておりますが、  
ほんとキャラが多いので使い分けるのが大変ですね。  
しかし頑張って書いていこうと思います。  
ではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6785p/>

---

天地無用！ GXP オリ主活動日記

2011年4月22日21時48分発行